
絶対平和宣言！！

黒猫 にゃんにゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対平和宣言！！

【コード】

N6806N

【作者名】

黒猫 にゃんにゃん

【あらすじ】

この春高校に進学した皆本ケイはクラスメイトの暗殺計画を耳にしてしまう。

ターゲットは幼なじみの平瀬ほたる。

暗殺者とは誰なのか。

容疑者は1年7組のクラスメイト41名。

彼は幼馴染の命を守ることができるのか？

暗殺者の目的とは？

日本という国に生まれた少年と少女。

彼らは国の未来を変える事件に巻き込まれていく。

プロローグ

皆本は廊下を歩いていた。誰もいない放課後の廊下には足音が妙に大きく響く。

窓から外を見る。運動部の練習風景。どこの高校にもあるありきたりな風景。

窓を閉め切った校舎では野球部の掛け声は遠くの方で聞こえるように感じる。なぜかその音がより、皆本の周りに静寂を作っていた。四階まで上がり、自分の教室である一年七組のドアを開けようとする中から人の話し声が聞こえた。

別にそのまま中に入ってもよかったのだがこの時皆本は躊躇した。もし教室の中の人が大事な話をしていた場合、大変気まずい。

中の人に存在を気付かれぬようこっそりと体を低くして教室の様子を確認することにする。教室にいたのは男女の二人組みだった。

誰もいない放課後の教室。二人きりの男女。恋愛経験の乏しい皆本には具体的な想像を巡らせることできないのだが、誰かに見られてはまずいことをするのだろうかということはわかる。

早々に退散しようと立ち上がった時、なにやら会話が聞こえてきた。

「どうです？ 計画はうまくいきそうですか？」

「今日は様子見つてところかしら。まあ気長にやるわ」

「しつかり遂行してくださいよ、暗殺の件」

(・・・あんさつ？ あんさつってなんだ？)

「ちよつと！ 放課後で人が少ないとはいえ誰かに聞かれたらどうするのよ！ この暗殺計画が知られれば成功率は格段に下がるわ！」

「聞かれたところで問題はないです。別の方法で平瀬ほたるを殺害するだけですから」

皆本の知らないところで世界はとんでもない方向に進もうとしていた。

暗殺者一

『東京都新宿区でテログループによる立てこもり事件のニュースです。事件発生から一七時間以上経過しているにもかかわらず現場にはいまだに進展はない模様です』

朝から嫌なニュースだ。昨日の夜はゴールデン番組を取りやめてテログループの立てこもりの特番がやっていた。

最近東京ではテロ行為が頻発していた。しかし国民はたいして危機感を感じていないのではないかと皆本は考えていた。

本来ならテロリストは恐ろしい存在であり、恐怖の象徴だ。しかし日本ではテロリストが英雄なのだ。

いつからだろうか、日本がそんな壊れた国家に成り下がったのは皆本は乱暴にテレビを消し早々に家を出た。

高校へは徒歩で向かう。徒歩で学校へ通える距離にあるということがこの家を選んだ理由のひとつだ。

その他にも理由はある。大家さんがいい人そうだとか、庭の金木犀があったことだとか。

皆本はそういっとうしようもないくらいの平凡な日常を好んでいた。

この町でテロリストはテレビの向こう側の存在であり、映画の登場人物とそう違いはない。

皆本はこの春、高校生になった。なにか努力をして高校生になったわけではない。

時間が経過し、年を重ねた結果高校生になったのだ。特別なことなどなにもない。誰でもなしえることだ。

高校生になったからといって特に変わることはないだろう。なにができることが増えるわけでもない。なにもできることなどない。

だから早く大人になりたかった。いかなる困難にも立ち向かえる大人に。

「お久しぶりです、皆本さん」

皆本は振り返る。道の真ん中に立っていたのは花が咲くように笑う少女だった。

彼女は今、中学のセーラー服ではなく高校のブレザーの制服を着ている。心なしか中学のそれよりスカートが短いように思える。

彼女は教師の言うことを必ず守り、教師からもっとも好かれるような生徒だった。

だから制服のスカートを短くする彼女を見て皆本は違和感を感じずにはいられなかった。たいしたことではないのだが。

「久しぶりだな姫路。中学の卒業式以来かな？」

姫路は歩幅を合わせるように皆本の横に並んだ。

「中学卒業してから少し旅行をしていますが、入学式に合わせて戻ってきたんです」

「ずいぶん長い卒業旅行だね。親と一緒に行ったの？」

「いえ、友人とです」

一カ月も旅行するにはどのくらいお金がかかるのだろうか。皆本は頭の中で計算していたが途中で嫌になり話題を変えることにした。

「同じクラスに知り合いがいるといいな」

「皆本さんは人見知りですもんね」

姫路はクスクスと口元を隠しながら笑った。

人と話していると時間が経つのは早いもので学校の校舎が見えてきた。昇降口に新入生が集まっている。どうやらクラス発表があるようだ。

掲示板には左から一組、二組とクラスごとに生徒の名前が掲示してある。

皆本たちの位置からはクラス名は見えるものの生徒の名前までは見ることはできなかった。かといって人が多すぎて前には行けそうもない。

「人が多すぎて自分の名前を見つけるのは一苦労だね」

「一年七組ですよ」

「えっ？」

また同じクラスですね、と、姫路は言った。

「姫路は目がいいな。ここから見えるってサバナでも生活できるよ」

「それはさすがに無理です」

皆本たちは教室に向かうことにした。

下駄箱の扉を開き、外履きを入れる。振り返ると姫路は背伸びをしていた。彼女の身長では少々下駄箱の位置が高いらしい。

「姫路が同じクラスで良かったよ」

新品の上履き。かかをつぶすのには抵抗がある。

「わたしだけじゃないですよ。他にも馬場さんに、あとは平瀬さんも」

「.....」

心臓が喉元まで上がってきた。急いで心臓を飲み込む。

「皆本さんって平瀬さんがいるからこの高校を選んだんですよね？
違うんですか？」

姫路は見上げるようなかたちで皆本の顔を覗きこんだ。

いたずらに笑う彼女の顔が憎らしい。

「別にそんなつもりはないよ.....」

姫路は、ふーんと意味ありげに笑った。そして階段をいつきにか
けあがり踊り場で振り返る。今度は皆本が見上げるかたちになる。

「平瀬さんはあなたがいるからこの高校を選んだんだと思います」
それはどうだろうか、平瀬に聞いてみようかと皆本は考えたがや
めることにする。

平瀬は素直には応えないだろう。

教室に入ると真っ先に目に入ったのは黒髪の乙女だった。美しい
黒髪を束にし後ろで結わえている。ポニーテールとはまた違うよう
だが、ファッションに詳しくない皆本にはよくわからなかった。

しかし麗しの黒髪の乙女がいたところで心がときめくことはない。

京都中を走り回るほど黒髪の乙女が好きな男など現実にはいないのである。

窓際の席の黒髪の乙女は頬杖をついて窓のほうを見ていた。顔は見えない。見る必要などないのだが。

「麗野さんですよ」

皆本が麗野を見ていたのに気付いたのか、姫路はそう説明した。

「お前はすでにクラスメイトの顔と名前と席順を把握しているのか？」

「当然です。住所も生年月日も好きなアイドルも知ってます」

「最後変なの混じっていたが、ちなみに麗野さんの好きなアイドルは誰なんだ？」

「星野すみれです」

「実在の人物じゃないのかよ」

声が大きかったのか麗野がうるさそうにこちらを見た。

恐ろしいほどの美人だった。

意志の強そうな目。というより他人の意見をまったく聞かなそうだと形容すべきだろうか。

それが麗野の第一印象だった。

ああ、彼女とは一度も会話を交わすことなく我が青春は終わるのだろうと思しながら、皆本は自分の席につく。

黒髪の乙女（美少女）と同じクラス。これを運命と呼ばずとして何と呼ぶ。

麗野になんと声をかけようかと決めかねていると、自分の席に向かったはずの姫路が戻ってきた。

「なぜお前はおれの邪魔をする」

「皆本さんの年齢〓彼女いない歴を守るためです」

「とんだ迷惑だな」

「富んだ快樂です」

「人を変態のように言わないでくれ」

「皆本さんは黒髪の乙女が好きですもんね」

あつても好きなのはショート黒髪でしたね。姫路は手をポンと叩き、思い出しとように言った。

「平瀬も昔はあのくらい髪が長かったよ」

「誰も平瀬さんの話はしていませんよ？」

姫路はクスクスと笑った。

ふと麗野を見ると彼女と目が合った。

氷のような無感情な表情。心を見透かすような冷たい目だった。

暗殺者一

入学式も終わり、放課後になる。授業もないためお昼で学校も終わりである。

クラスメイトが声を掛け合っている。すでに青春の1ページを共にする親友を得たのだろうか。

皆本はどうもこういいうイベントが苦手だった。初めてが苦手なのかもしれない。

慣れないことができない。

馴れ合うことができない。

ただの言い訳だと皆本はため息をついた。

カバンを掴み、帰ろうとした時、後ろから声をかけられた。

「あら、皆本くん。同じ学校だったのね」

そこにいたのは病的なまでに肌の白い少女だった。

整った顔立ち。

制服の上からでもわかるスラっとした体躯。

誰彼かまわず自分の意思を最優先するようなそんな目。事実、彼女は自分の意見を曲げない。曲げたことなどない。

スカートは買ったときからなにもいじってはいないであろう長さ。しかし彼女から真面目という印象はまったく受けない。たんに興味がないのであろう。

前に会った時よりずっと大人びていた。身長皆本のほうがぎりぎりで高かったりするのだが。

「同じ学校どころかおれ達は同じクラスだよ、平瀬」

「あら、それは気がつかなかったわ。それより皆本くんは今帰りなのかしら？」

「そうだったらどうなんだよ」

「女の子がこんなこと聞くなんて、一緒に帰ろうと言っているのと同じじゃない。相変わらず頭の回転が遅いのね」

平瀬は皆本のことなど待たずに教室を出て行ってしまった。急いで追いかける。

「今日のあなたの自己紹介はなんだったの？ 聞いていて恥ずかしくなかったわ。皆本くんってば高校生にもなつてまだ中二病なのかしら」

「ちげえよ！ 別に変なこと言つてないだろ！」

「ただの人間には興味ありません」

「おれは、『なければ作ればいいのよ！』なんて言わないからな！ 話を捏造するなよ！ それよりおれがクラスにいたこと知つてただろ。知つて知らない振りしていただろ！」

「あなたの話はずまらないわね。わたしから話題を振つたのだからそれを盛り上げるのがあなたの仕事でしょ？」

「厳しいな……だがやってみせよう。おれにできないことなどない、さあ新たな話題こい！」

「今日のニュースは見たかしら？」

……

平瀬の顔つきが変わつた。どうやら笑える話題ではないようだ。

「それはなにか意味のあることか？」

「意味なんてないわ、雑談よ」

雑談……か。

「ニュースつてのは東京でおきたテロのことか？」

「ええ、また増え始めてるわね。なんだか怖いわ」

「ここ最近、東京ではテロがまた増え始めている。片田舎に住んでいる皆本たちには関係のない話だが。」

「どう思う？」

「どうって何だよ。おれには関係ないし」

「やっぱり『蛍火』が関係しているのかしら？」

二年前。

海外のテロ組織に日本人男性が拉致される事件が起きた。

拉致された男性は有名な二世議員であつたため、日本国民の関心は高く、ニュースで大々的に取り扱われた。

国民の意見は二つに分かれた。

平和主義を主張し、平和的な解決を求める者。

平和主義を覆し、好戦的な解決を求める者。

日本政府の対応に注目が集まった。

日本は平和主義を掲げる国である。

日本は戦争をしない。日本は軍事力を放棄する。悲劇は繰り返されることはない。

日本政府の行った行動は前者であった。

事件は解決した。組織の幹部は逮捕され、組織は壊滅した。

しかし拉致された男性は死んだ。殺されたのだった。

『蛍火』という反政府組織はこの拉致事件をきっかけに生まれた組織であった。

彼らは日本が軍事力を持っていたのなら、拉致された男性は死ななかつたと主張した。そもそも拉致事件は起きなかつたのではないかと。

彼らの目的は憲法九条を破棄し、日本を軍事国家とすることだった。

日本政府は蛍火とも、拉致事件時と同様、平和的に解決しようとした。

しかし話し合いなどうまくいくはずもなく、ついに蛍火は日本政府に武力行使をすると犯行声明を出した。日本政府は自衛隊を派遣し、蛍火を鎮圧した。

平和主義を主張する日本政府が武力に武力で対応したのだった。

蛍火は解散したがテロ行為は後を絶たなかつた。

蛍火が活動していた期間、日本経済は回復の兆候を見せたのだ。

日本を変えるのは政治家ではない、テロリストであると国民は認めざるを得なくなったのだ。

後に蛍火の起こしたこの事件は日本革命と呼ばれるようになる。

皮肉なことに争うことが利益を生むことが証明されてしまったのだ。

蛍火を救世主だと崇める者すら現れる始末であった。

革命後の日本はテロ事件の多発する治安の悪い国になってしまった。

「……………おれたちには関係ないだろ」

「関係ないことはないでしょ？」

その時携帯電話が鳴った。初期設定のままの無機質な電子音。

「出ないの？」

平瀬は不機嫌そうに眉間にしわを寄せながらそう言った。

「……………でも」

「いいから出なさい」

しぶしぶポケットから携帯電話を取り出す。ディスプレイに表示された文字は非通知の文字だった。いまさら出ないわけにもいかず、通話ボタンを押す。

「もしもし？」

「……………」

「もしもし？ あー誰ですか？」

なんだか気持ちが悪い。皆本が電話を切ろうとすると、電話から機械を通したような無機質な声がした。

『いまから教室に来てください』

そこで電話は切れてしまった。

「誰から？」

平瀬は興味なさそうに言った。

「わかんないけど、忘れ物したから教室戻るわ。平瀬は先帰ってて」

「ちよつと！」

皆本は駆け出した。教室に行く義理はないかもしれないが、なぜか行かなくてはならない気がした。

暗殺者三

皆本は放課後の校舎を歩いていた。誰とも知らない人物に呼び出されたからである。

電話の相手が女生徒であるのならポジティブな妄想に従事することも可能なのだが相手は残念ながら男の声だった。

階段を上りながら皆本は平瀬のことを考えていた。

平瀬の機嫌が悪かった。彼女は突然機嫌を悪くすることがよくあった。それは昔からである。

皆本と平瀬の関係は簡単に言えば幼馴染だった。

平瀬家といえば日本でも有数の名家である。何人もの政治家を輩出しており世間の認知度も高い。

本来、皆本のような一般家庭の人間が平瀬家の令嬢と交友関係があるのはおかしな話なのだが、あるものは仕方ない。

皆本は平瀬の祖父、現平瀬家頭首、平瀬藤次郎にひどく気に入られていた。

小さい頃になにかあったらしいのだが皆本は覚えていなかった。

つまり皆本は物心つく前から平瀬と一緒にいるのである。

しかし最近はめつきり遊ぶこともなくなった。今日話したのだった。いつぶりだっただろうか。昔はよく三人で遊んでいたというのに。

.....

遠くの方で野球部の小気味の良いボールを打ち返す金属バットの音が聞こえた。それに対して校舎内は静かである。

目的の教室にたどり着く。だが皆本はすぐにドアを開けようとはしなかった。

中に人の気配を感じ取ったのだ。呼び出されたのだから人がいるのは当たり前である。

体を低くして中の様子を探る。どうやら中にいるのは男女二人組みのようである。なにか言い争いをしているようにも見える。

誰もいない放課後の教室。二人きりの男女。

恋愛経験の乏しい皆本には具体的な想像を巡らせることできないのだが、誰かに見られてはまずいことをするのだからということとはわかる。

電話は間違い電話だったのだ。わざわざ学校に戻ってきた意味がなかった。

皆本はため息を溢しながら早々に退散しようと立ち上がった。するとなにやら会話が聞こえてきた。

「どうです？ 計画はうまくいきそうですか？」

計画？ なんだ計画って。

「今日はまだ様子見つてところかしら。まあ気長にやるわ。そのためへの潜入作戦なのだから」

「しつかり遂行してくださいよ、暗殺の件」

「ちよつと！ 放課後で人が少ないとはいえ誰かに聞かれたらどうするのよ！ この暗殺計画が知られれば成功率は格段に下がるわ！」「聞かれたところで問題はないです。別の方法で殺害するだけですから」

急いでその場を離れた。本能がそうさせた。あの場にはまずい。殺される、と。

皆本は全速力で廊下を走り、階段を駆け下りた。途中で何度も転びそうになったが、どうにか転ばずに走る。

平瀬を暗殺。確かにそう聞こえた。聞き間違いじゃない。

校舎を出て曲がり角を曲がったところで皆本は後ろを振り返った。どうやら追っては来ていないようである。

皆本は心臓を押さえ、呼吸を整えることに集中した。

（暗殺だって？ ただの高校生が？ いや、あいつらは……）
・あいつらマジだった。マジで人を殺そうとしている（

口の中が血の味がする。全身から汗が噴出す。

（どうする？ 誰かに相談するか？）

だが暗殺者がクラスメイトの中にいるなんて話誰も信じはしない

だろう。皆本も完全に信じたわけではなかった。
心のどこかで常識が否定していた。だが本能が肯定しているだっ
た。

保安部特殊警邏隊？

放課後の教室。

皆本は一人立ち尽くしていた。

いや座っているのだから立ち尽くしていたは間違いである。皆本は座り尽くしていた。

学校というものは誰かと一緒にいなければならぬというルールでもあるのかもしれない。

みんなが自然と似たもの同士グループを作っていく。

おとなしい者はおとなしい者同士、騒がしい者は騒がしい者同士。そんな中、皆本はクラスに馴染めずにいた。

平瀬を暗殺しようとしているのが誰なのか未だにわからずにいた。皆本は平瀬を監視していた。

暗殺者は平瀬に近づいてくるのだろうかと思ったのだ。だが、そんな人物はいなかった。

平瀬はいつも一人で、唯一話すのは姫路ぐらいだった。

皆本は誰にも相談できずにいた。信じてくれるものなどいないだろうし、もし相談した相手が暗殺者の仲間かもしれない。

信頼できる人物。

まっさきに思い浮かんだ人物は姫路だったが、彼女なら大人に相談しようといいかねない。

普通なら困ったことがあれば大人の力を借りるべきなのだろうが、子供の言う暗殺計画なんて信じるだろうか。

ばかにされるに決まっている。皆本は疑心暗鬼に陥っていた。

皆本は学校ではいつも一人だった。

休み時間は次の授業の準備をしていればいいが、昼休みはそうもいかない。クラスメイトが仲良くお昼を食べている中、一人でいるのは目立つ。だから皆本は昼休みになると教室を抜け出して中庭でお昼を食べることにしていた。

警戒は解けない。常に誰かに見られている気がした。誰かに見張られている気がした。

平瀬を殺そうとしているのは誰なのか、目的はなにか。暗殺者は未だにアクションを起こさない。

教室の後ろのドアが開く。思わず振り返りドアを開いた主と目が合ってしまう。

そこにいたのはクラスメイトの相澤だった。

彼は活発で誰とでも仲良くできるような少年だった。どこにもいる少年。

「皆……本だっけ？ 一人でなにやってんだ？」

彼はどうやら忘れ物を取りにきたらしい。しかし自分の席には向かわず皆本に近づいてきた。

「悩み事か？ おれでよかつたら相談に乗るぜ」

相澤は普通の高校生に見える。まさかクラスメイトの女生徒の暗殺計画を練っていそうも思えない。

皆本は隠さず、入学式の出来事を彼に相談することにした。

「笑ったりしない？」

「笑ったりしないぜ？」

「ホント？」

「早く言わないと怒りはするだろうな」

「このクラスに暗殺計画を立てている生徒がいるんだ」

「暗殺計画だつて！？」

相澤が押し黙ったのは一瞬で、すぐに吹き出した。

「アハハハハハハハハ。暗殺？ 高校生が？ 漫画の読みすぎだぜ！」

「笑わないって言っただろ！」

皆本はホツとした。相澤はただの高校生だった。彼は暗殺者なんかじゃない。

まわりの机が倒れる。

皆本は自分が羽交い絞めにされていることにしばらく気がつかない。

かった。

「どこまで知っている？」

頬に冷たい金属の感触。皆本はナイフを突きつけられていた。

保安部特殊警邏隊？

骨がみしみしと悲鳴をあげる。筋肉が断裂しそうだ。

「なにも知らない！」

「嘘つけ！ 知らなかったら暗殺なんて言葉出てくるか！」

殺される！

そう思ったときまたもや後ろのドアが開いた。

「相澤さん！ なにをやっているんですか！ 彼を放してください」

首を固定されているので振り向けない。しかしこの声は十分すぎるほど聞き覚えがあった。

「こいつ暗殺計画を知ってやがった！」

「皆本さんは関係ありません。はやくナイフを下ろして」

「ちっ、仕方ないぜ」

「ゲホッ、ゲホッ」

ようやく開放された。体が崩れ落ちる。肺が酸素を欲している。

急いで呼吸を開始する。

「大丈夫ですか？ 皆本さん」

皆本の肩に手をやり涙目でこちらを見ていたのは姫路だった。

「助かったよ姫路、それより相澤は危険だ！ 殺しにきたんだ！

平瀬を殺しに」

皆本は混乱しきっていた。展開が速すぎてついていけない。

「大丈夫です。相澤さんはわたしの仲間ですから」

姫路が相澤の仲間？ そういえば暗殺者は二人いた。男女の二人組み！

「お前らなに者だ？ 姫路もこいつと仲間なのか？」

姫路は目を逸らした。彼女の固く結ばれた口は唇を噛んでいるようにも見ええる。

「安心してください、わたしたちはあなたに危害を加える意思はありません。わたしたちは日本政府直属の組織、保安部特殊警邏隊、

トクラのメンバーです」

保安部。政治家のような日本政府の要人を警護するボディガードのエキスパート。

保安部は今の日本にはなくてはならない存在になっていた。漫画や映画のモチーフにもよく使用される日本のヒーロー像である。

「おいおい、一般人にそこまで教えていいのかよ」

「トクラ？」

皆本はトクラという言葉には聞き覚えがなかった。

「皆本さんが知らなくても無理はありません。公にはされていない秘密組織ですから」

「秘密組織がなぜこんな高校にいる」

皆本は姫路の手を払いのけ立ち上がった。数歩後ろに下がる。姫路が動くことはなかった。

後ろに立っている相澤はことの顛末を外から傍観するようである。

「わたしたちは平瀬さんを警護する任務にあたっています。平瀬さんを守るためこの高校に潜入捜査をしています」

「潜入捜査？」

「はい。トクラは、保安部正規のメンバーでは護衛が困難な人物を護衛するために特別編成された組織です。」

平瀬さんを護衛するにあたって学校内でも活動しなければならぬのはおわかりですよ？ 正規のメンバー、つまり大人が校舎内をうろつくのは明らかに不審です。

そのためわたしたちのような平瀬さんと同年代の保安部の人間が警護にあたっているんです」

「そんな話平瀬から聞いたことがないぞ」

「それは当然です。平瀬さん本人にはわたしたちの正体を明かしていませんから」

「なぜ本人に隠す必要がある？」

「わたしたちは存在するだけで要人が近くにいることを露呈してしまいます。政治家ならともかく平瀬さんはまだ学生。」

わたしたちが大手を振って街中を闊歩すればかえって平瀬さんを危険に晒しかねない」

姫路の表情はいままで見たこともないくらい真剣な表情をしていた。皆本の知らない姫路の裏の顔。

「まさか姫路は中学の時も平瀬を警護していたのか？」

「もちろんです！」

姫路が初めて笑った。その表情に安心させられる。どうやら敵ではないようだ。

もしここにいる人間がまったくの他人だったなら信じられなかったかもしれないが、相手は中学からの同級生である姫路だ。皆本は彼女の笑顔を信じることにした。

「知らなかった・・・長い付き合いなのに」

「皆本さんに知られる程度ではトクラは勤まりませんよ、他に質問はありますか？」

「暗殺者についてだ。あいつらはなんなんだ」

「わたしたちは暗殺者を都合上にエージェントと呼んでいます。エージェントはすでにこの七組に何名か潜入している可能性があります」

それは間違いないだろう。この高校の制服を着た男女が暗殺について会話しているのを皆本は聞いている。

「なぜエージェントは平瀬を暗殺しようとするんだ？ ただの女子高生だろ？」

「目的は不明です。しかし平瀬さんは平瀬家のご令嬢。命を狙われともおかしくはありません。このことは皆本さんがよく知っているのではないですか？」

確かに昔、誘拐まがいのことはあった。だが、平瀬の周りには常にSPの監視があったため誘拐は失敗したが・・・。

「他に質問は？」

「じゃあ一番聞きたいこと」

「なんですか？」

「この事実を知っておれはどうなる？ 殺されるわけではないだろうけど」

「事実を知ってしまった人間は名を変え、姿を変え、どこかに消えてもらうのが通常の手段なんですけれど、今回は別の方法をとります」

「おい、姫路まさか！」

今まで口を閉ざしていた相澤があわてたようにそう言った。

「ちょうど人手が欲しかったところです。皆本さん、あなたはわたしたちの仲間になってもらいます」

「それってつまり？」

「あなたもトクラの一員です」

拒否は死を意味しますよと、姫路は花を咲かせたように笑うのだった。

「ただの高校生に人を守るなんてできるのか？」

「技術なんてものはどうとでもなります！ 大切なのは人を守りたいという気持ちです」

姫路はニコニコだった。新しい仲間ができて嬉しいのだろうか。

「で、おれは何をしたらいいんだ？」

「仲間になってくれるんですね！」

「拒否権はなさそうだしね」

こんなところで平瀬に死んでもらっては困る。それが皆本の本音だったのだが。

「エージェントは今まで特にアクションを起こしませんでした。これはなぜだかわかりますか？」

「殺すチャンスがなかったのか？」

「それもあるかもしれませんが、おそらく彼らは平瀬さんを事故死に見せかけて殺害する気なのだと思います」

「なんで？」

「これは推測の域を超えませんが、彼らは平瀬さんが誰かの手によって殺されることが公になるのを恐れているんです。つまり政府関

係者が黒幕である可能性が高い」

「日本を背負って立っている人間がただの女子高生を暗殺？ ばか
げてるな」

「だからこれはわたしの推測です。他にだって考えようはいくらだ
つてあるんですから落ち着いてください。とにかくエージェントは
今までアクシオンを起こさなかった。けれど来週なにか仕掛けてき
ます、必ず」

「来週？」

「来週はクラスの親睦を深めるための校外学習があります。行き先
は遊園地です」

皆本の通う高校は高校生にもなって遠足がある高校だった。さす
がにおやつ三百円までなどというルールはないが。

「校内で事故死を装うのは大変に困難です、しかし遊園地なら十分
に事故が起きてもおかしくない状況を作り出せます」

「つまりチャンスってやつか」

「ピンチの間違えでは？」

「いや、チャンスだ。エージェントの尻尾をつかむ、な！」

「わかっていないようですがわたしたちの任務は平瀬さんを守るこ
とであって、エージェントを捕まえることではありません！」

「同じことだ。エージェントが捕まれば平瀬を守ることもなる」

姫路は早くも皆本を仲間に入れたことを後悔し始めていた。

籤引の確率？

ゴールデンウィークも明けた五月末、皆本たちは校外学習へ向かうべく、バスで移動中である。

隣には相澤。姫路は平瀬の隣に座っているため席は遠い。

「早速今日の打ち合わせするぜ」

「本当におれって役に立つのかな？ お前らはプロかもしれないけどおれは素人だよ？」

「知らねえよ！ 姫路がいいって言うてるんだから大丈夫だ！」

皆本は相澤の無責任さに力チンときた。しかし彼が守るのは平瀬であって皆本ではない。自分の身は自分で守らなくては。

「校外学習は班行動だ。うちのクラスの委員長は班をくじ引きで決めるらしい。昨日の放課後作ってた」

七組の委員長は人の見ていないところで努力する人間のようだ。

彼の場合好きでやっているかもしれないが。

「平瀬と同じ班にならなければ護衛は困難だね」

「さらにいうとエージェントが平瀬と同じ班になるのは避けたい」

「七組の人数は四一人、班の構成人数は六人、おれたちは三人、つまりおれたちの誰かが平瀬と同じ班になれる確率はざっと三七パーセントってところか」

「決して低い数字ではないぜ。十分可能だ」

バスが減速する。心臓は破裂しそうなくらい波打っていた。

バスを降りる。皆本は体を伸ばした。

今日が平日だからか遊園地にはあまり客がいなかった。もしかしたらいつもいないのかもしれない。

つまり皆本の高校が貸しきっているようなものだ。

「じゃあくじ引きするからみんな集まって！」

元気よくそう叫んでいるのは七組の委員長である。彼はいつでも

楽しそうである。

「皆本さんちよっと」

姫路は小声で皆本に耳打ちした。平瀬が近くににいるからだろうか。

「平瀬さんに先にくじを引いてもらいます」

「なんで？」

「先に引いてもらわないと細工のしようがありません」

「細工するのかよ」

「引き当てたくじを前もって用意したくじにすり替えるんです。そうすれば平瀬さんと確実に同じ班になれます」

「そんなことしたら平瀬の班が一人多くなるからすぐばれちゃうよ」

「問題ありません。あの委員長のことですからくじの数が多少前後していたとしても誰も不審には思いません」

皆本は委員長を一瞥した。否定できない。

「五班だぜ！」

「ちよつとなに勝手に引いているんですか！ 相澤さん！」

「姫路の話長いからだぜ」

悪びれもなく素のリアクションを返した相澤に対して、姫路は完全にあきれ返っている。

今度は平瀬がくじを引く。折りたたまれている紙を開く平瀬。

「平瀬さんは何班でした？」

姫路がそれとなく確認を取った。

「わたしは二班のようね」

「つまりおれは平瀬とは同じ班ではないのかよ」

相澤は手を地面について大げさに落ち込んでいた。

「次はおれが行く」

皆本が前に出ると委員長が眩しすぎるほどの笑顔でくじ引きの箱をこちらによこした。

くじ引きの箱に手を入れる。紙の感触がくすぐつたい。

どの紙にも特に違いはない。当たり前のことだが。

これで二班を引き当てることができなければ？

もしかすれば今日平瀬が死ぬかもしれない。
同じ班になったところで皆本にできることはないかもしれない。
それでも。

皆本は一つの紙を掴み、箱から手を引き抜いた。折りたたまれた紙を開く。

「何班ですか!?!」

「何班なんだよ!」

そこに書かれていた数字は………2。

「二班だ!平瀬と同じ班だああああ!」

皆本は叫んだ。他のクラスかも注目を集めるほどに。

みんな笑っている。

「なにやってるんですか皆本さん」

「こつちまで恥ずかしいぜ………」

「申し訳ない……。嬉しかったもんで」

目の端で平瀬のほうを見ると目が合った。しかしすぐにそらされてしまった。

「なんだよあいつ」

「あつわたしも二班です」

「なーにー!」

皆本と相澤は同時に叫んだ。

「ちっ、結局おれだけ仲間はずれかよ。まあおれは普通に楽しむからあとは二人に任せませ」

相澤は片手を振りながら行ってしまった。

「ちよつと相澤さん! っで行ってしまいました。よろしくお願ひしますね……。皆本さん」

大丈夫なのか?このチーム。皆本は心配せずにはいらなかった。

籤引の確立？

皆本、玖珂、藤川、姫路、麗野、そして平瀬。二班のメンバーである。

「細工しなくともなんとなくかなったな。ところで姫路、この中にエージエントはいると思うか？」

「可能性は低いですが注意するにこしたことはありません。わたしと皆本さん、平瀬さんをぬいた三人には常に警戒しましょう」

皆本は三人をそれぞれ見た。

玖珂はクラスを中心グループであるサッカー部の連中と仲の良い少年だ。見た目は爽やかでいてスポーツマン的な印象である。背が高く百八十をゆうに超えている。

麗野は黒髪の乙女だ。彼女がクラスに普通に馴染んでいるのには皆本は驚いた。どこか平瀬に雰囲気似ているからかもしれない。

彼女は無口だけれど学校を休んだクラスメイトにノートを率先して貸すような女の子だった。

彼女はエージエントではないだろう。麗野がもしエージエントだったとしたら皆本は誰も信じられなくなる自信があった。

藤川は……。特に印象がなかった。

「なんかすごい失礼なこと言われた気がしたんだけど」

藤川は誰に言うでもなくこぼしていた。

入場ゲートをくぐる。すでに班での行動は始まっている。

「まずは遊園地といえばジェットコースターですよね」

そう言ったのは玖珂だった。

「いいですね」

「行こう行こう」

ジェットコースターに向かって歩き出した第二班は自然と列になった。

先頭は玖珂と平瀬。皆本の位置からはなにをはなしているか聞かないが、なにやら楽しそうである。

平瀬の笑顔は久しく見ていなかった。皆本の前以外では常に笑っているのだろうか。

悩んでも仕方のないことだと皆本はため息をついた。

その次に歩いているのは麗野と藤川。二人に会話はない。

麗野はいつもどおりなのだが藤川が緊張しているようだ。こんな美少女が隣にいては緊張するのも無理はないが。

最後列を歩いているのは皆本と姫路だった。

「ジェットコースターは非常に危険です」

「ジェットコースターが怖いのか？姫路」

「違います！ そんなに子供じゃありません！」

姫路はポカポカと皆本を叩きながら言った。

「そうじゃなくてジェットコースターは身動きが制限されて護衛しにくいです！」

「それはまずいね。どうするの？」

「重要なのは座る位置です。ジェットコースターは安全バーがあるので体が固定されてしまいます。よって手の届く範囲の人間しか殺せません。つまり平瀬さんの隣、もしくは後ろの席に座らなければ殺すことはできないはずです」

「ジェットコースター自体を爆破された場合どうするんだよ」

「その可能性は低いです。爆破は目立ちすぎますし、この班にエージェントがいた場合自殺行為になります」

「つまり平瀬を守るには平瀬の隣か後ろをおれたち二人で取らなければいけないのか。……いやちょっと待って。昔漫画で読んだことがある」

「なんですか？」

「ジェットコースターに乗っている最中に人を殺すんだよ。そして被害者の隣に座っていた女性のかばんから血のついたナイフが」
「なおさら平瀬さんの隣は死守しなくてはならなくなりましたね」

「人の話は最後まで聞けつて。犯人は隣に座っていた女性じゃなかつたんだよ」

「じゃあ被害者の後ろに座っていた人ですか？」

「それも違う。被害者の後ろの後ろだ」

「なんですかそれ？」

「犯人は新体操をやってたんだよ」

「すみません、意味がわからないんですけど……」

「ちよつとみんなと握手してくる」

皆本は麗野に向かって言った。

「麗野さん、パンツ見せて？」

「ちよつと！」

豪快な音が響く。麗野は見た目によらず大胆なようだ。

「姫路。麗野さんにビンタされた」

「あたりまえです！ なに言ってるんですか、って話し込んでいたらいつの間にかジェットコースターの目の前にいました！」

「気がつくの遅いだろ。しかもあいつら、もう乗り込んでるし」

他の四人はもうコースターに乗り込んでいた。仕方なく皆本もあとに続く。

座席に乗り込むと安全バーが下がってきた。たしかにこれでは身動きが取れない。隣に座っている人にすら手は届かない。どうやら姫路の考えは杞憂に終わったようだ。

「皆本さんに嘘をつきました」

隣の姫路がうつむきながらそう言った。

「なんだ嘘って？」

「わたしジェットコースター苦手なんです」

「それはなんとなく予想していたよ」

ガタガタと恐ろしい音を響かせながらレールを上っていく。空に手が届きそうになる寸前、皆本は目を閉じた。

日本の夜明け巻

「二人とも大丈夫か？」

バスは学校に着いてしばらく時間は経過していた。クラスはすでに解散をしていたが皆本と姫路はその場を動けずにいた。

「ああ、とりあえず今は話したくない。口を開けたらいろいろ出そう」

「ジェットコースターを最初に乗ったのがいけませんでした。もう頼まれても絶対乗りません」

ジェットコースターを乗った後、皆本と姫路はダウンしてしまっ

た。
「まったくこれで平瀬になにかあったらどうするつもりだったんだよ。始末書じゃすまねえぞ」

「……………ごめんなさい、そして相澤さんには言われたくないです……………」

姫路はうなだれている。気持ちが悪いのか、自分を情けなく思っているのか。そのどちらでもあるような気がした。

皆本のポケットが震えた。正確に言うところとポケットの中の携帯電話が震えていた。バスに乗った時にマナーモードにしておいたのだ。

皆本はそういう些細なルールを守る人だった。よく言えば真面目なのだろうが、悪く言えば彼は規則を厳守する固い人間だった。

皆本は携帯を開く、電話の主は玖珂だった。玖珂とは今日電話番号を交換したのだ。まともな高校の友人とは初めてだった。それがちよつとだけ嬉しかったりする。

「やっぱり友達が欲しかったのか。皆本は改めてそう思った。」

「誰からですか？」

「姫路はこちらを見ず、うな垂れながら言った。」

「玖珂くんからだよ。えつと……………」

「通話ボタンを押す。電話が繋がる。電話の向こうは少しガヤガヤ

している。玖珂は繁華街にいるのだろう。彼の家は繁華街の向こうなのかもしれない。

『こんにちは。早速電話してみました。今は平気ですか？』

「うん、大丈夫だよ、体調は芳しくないけれど」

『これからあなたにはお世話になるので挨拶をと思ひまして』

世話？友達になりたいということなのだろうか。皆本はこのようなことを言われたことは今まで一度もなかった。こんな真正面から友達になろうなんて。

「こちらこそよろしく、玖珂くん」

『あまり長くお電話するのはそちらご迷惑になるやもしれませんが、失礼させていただきます。……。それではトクラの方々にもよろしくお伝えてください』
そこで通話が切れる。

今、玖珂はなんと言った？

「どうかしました？」

姫路が心配そうに言った。皆本は声をかけられて初めて通話が切れた電話を耳に押し付けていたまま静止していたことに気付いた。

「いた」

「なにが？」

「二班にエージェントがいた」

「いや、でも今日はなにもなかったじゃないか。エージェントがあの中にいたとしたらなんらかのアクションを起こしたはずだぜ」

「今の電話の最後に玖珂は言ったんだよ。『それではトクラの方々にもよろしく伝えてください』って」

「なにがおかしいんだよ。おれたちはトクラなんだぜ？ どこもおかしなところなんてないじゃないか」

「なんで相澤と姫路がトクラだって玖珂は知ってるんだよ！ それにおれと行動を共にしていることも」

皆本が相澤たちと行動したのは今日だけ。つまり朝のバスの中、遊園地内程度しか行動をともししていない。この間に玖珂は皆本た

ちが繋がっていることに気付いた。相当なキレ者であることは間違いない。

「理由は簡単だ。玖珂がエージェントだからだ。事前に平瀬の警備状況を知っていたからだ！」

玖珂がエージェントだった。そして皆本たちの正体はばれた。平瀬が殺される日はそう遠くないかもしれない。

日本の夜明け式

「今から、玖珂を追う！ 平瀬があぶない！」

「待ってください！ 玖珂さんがエージェントだと決まったわけではないじゃないですか！」

「皆本との電話の内容がそれを証明しているぜ？」

「じゃあなんで玖珂さんはわざわざ皆本さんに正体を明かすような真似をするんですか？ 彼がエージェントなら正体がばれないよう振舞うはずです。」

万が一彼がエージェントだったとして、先ほどの電話は罠です。

こちらが玖珂さんを追うように仕向けているです。危険です」

「それでも、おれは行かなければいけないよ」

皆本は制止する姫路を振りほどき走っていつてしまった。

「ああ、振られちゃったな。おれは皆本を追いかけるけどお前はどっする？」

「相澤さん、わかっているんですか？ 我々トクラは校内のみの活動しか許されていないことを。許容範囲外です。この件は上層部に任せます」

「出たぜ、いい子ちゃんが」

「なんですか！」

「始末書が怖くて人を守れるか！ ルールを守っているようじゃなにも守れない！」

「ルールを守って何が悪いんですか……。わたしはなにも間違ったことは言っていないません！」

「ああそうかよ！ 一生やってる！」

相澤は走りだした。このまま姫路と言い合いをしていては皆本の姿を見失ってしまう。

そして立ち止まっていた皆本に追いつく。

「おい、皆本。玖珂がどこにいるかわかっているのか？」

「知らん！」

「知らんって。電話の向こうから手がかりになりそうな音とか聞こえなかったか？」

「そういえば電話の向こう側が騒がしかった！ 駅前の商店街だ！」
皆本は再び走り出してしまふ。相澤も後を追う。

「騒がしいだけで商店街って決め付けるのはどうなんだ？」

「繁華街の向こう側には平瀬の家があるんだ。玖珂は平瀬の家に向かっているに違いない」

二人は繁華街を抜け、平瀬の家に向かった。

平瀬の家の前には背の高い少年が腕を組んで、塀に背を預けていた。

玖珂だった。

「お待ちしてしていました。おや？ お二人ですか。てつきりトクラのメンバーは三人いるものと思っていましたが」

相澤は小さく舌打ちをした。

「単刀直入に聞け！ お前の正体はなんだ！」

玖珂はこちらに向き直った。

「僕は『日本の夜明け』のメンバーです」

「『日本の夜明け』だって？」

「おや、ご存知でしたか」

「相澤、知っているのか？」

「ああ、『日本の夜明け』は超過激派のテロ集団。今東京中を混乱させている武装集団だ。テロ屋がこんな田舎に何の用だ」

「なんの用って平瀬を狙ってきたんだろ」

「ご明察です」

玖珂はパチパチと手を叩き、拍手した。

「次々に変わる国のリーダー。統率力の欠片もない。あなた方も知っているでしょう？ 今、国を変えることができるのは政治家じゃない。我々テロリストだ。だから我々『日本の夜明け』はこの国を洗濯することにしたんです」

「東京じゃあいろいろやっているようだな。国会議員の事務所襲撃。大臣の拉致監禁。それじゃあまだ飽き足りないのか」

「決定打が欲しいのです。国を揺るがすほどの」

「なにをする気だ！」

玖珂は口角を少し上げ、笑ったような表情をした。

「国会議事堂を襲撃します」

「それって!!」

「はい、二年前、日本革命時に蛍火が行ったことと同じです」

「けどあれは失敗しただろ」

「同じ轍は踏みません。だから蛍火の協力が必要なのです。僕は蛍火のリーダーに接触するためにこの町にやってきました」

「まさか平瀬が蛍火のリーダーだって言うんじゃないだろな？ 平

瀬はまだ高校生だぜ、日本革命の時なんか中学生だぞ」

「年齢は関係ありません。僕だってあなただって高校生ですが高校生らしからぬことをしているじゃないですか」

「まあそうだが……」

「平瀬が蛍火のリーダーだって根拠はあるのか？」

「根拠は二つあります。まず第一の根拠ですが、蛍火はある拉致事件がきっかけにして生まれた組織です」

「そんなことは誰でも知っている」

「拉致事件から組織結成までの期間があまりに短いのです。政府の内部情報が漏れいた可能性が高い。これは組織内に政府関係者、もしくはそれに準ずる者がいたのならつじつまが合います」

「だったら政府の中に告発者がいたんだろ」

「平瀬ほたるは平瀬家のご令嬢。平瀬家は政治家を何人も輩出する名家です。政府の内部情報を知っていてもなんらおかしくはない」

「政府関係者なんて他にもいくらだっているだろ。なに平瀬だけじゃない」

「第二の根拠です！ 蛍火の幹部は自分たちを蛍の名前で名乗っていました。ヒメボタル、オバボタル、ゲンジボタル、そしてヘイケ

ポタル。平瀬ほたるは政治の世界ではこう呼ばれてるんです。」

平瀬家の蛭、ヘイケポタルと。

日本の夜明け参

「そんなのこじつだけだ」

「ここまでくれば偶然ではすませられません。まあ僕も上層部にこの高校に潜入をするよう命を受けた時は疑っていました。平瀬ほたるはどこにでもいるようなただ少女でしたから。しかし今日確信しました。彼女が蛍火のリーダーだと。あなた方の存在によって！」

「おれたちの存在？」

『わたしたちは存在するだけで要人が近くにいることを露呈してしまいます』

皆本はいつか姫路が言っていた言葉を思い出した。

「トクラ、保安部特殊警邏隊を派遣するには保安部だけじゃない、公安部の承認も必要はずだ。違いますか相澤くん？」

「本当なのか、相澤」

「ああ、だからどうした！」

「公安が動く時、それはテロリストが事件にかかわっている時だけ。つまりあなた方トクラがうるついている時点で平瀬ほたるがテロリストに関係していることを証明している」

「平瀬がテロリストなわけじゃなくてテロリストの被害者だって場合もあるだろ！？むしろテロリストを国で保護するなんて聞いたことがない」

「確かに平瀬ほたるはテロ事件の被害者、いや被害者の遺族です。これは皆本さん、あなたがよくご存知なのではないですか？」

玖珂は皆本を見た。身長の高い彼が皆本を見下ろすというのは威圧感のある行動だった。

「……平瀬の兄貴はテロリストに殺された。海外のテロリストに皆本は玖珂には目を合わせようとせずうつむいた。

「海外のテロリストってまさか！」

「そうです。蛍火が生まれた諸悪の根源、海外テロリストの拉致事

件で亡くなった日本人男性は平瀬ほたるのお兄さんだったのです。どうですか？　ここまでの条件がそろっていてまだ偶然だと言いますか？」

相澤は言い返せなくなり、唇を噛み締めた。

「じゃあおれたちはテロリストの小娘を護衛してたつてのかよ。政府を倒そうとしている人間を政府側のおれたちが護衛してるなんて滑稽だぜ」

皆本は顔を上げ玖珂を睨みつけながら言った。

「じゃあなんで。なんで平瀬を暗殺しようとする。蛍火のリーダーに協力を求めるのにわざわざ殺す必要はないだろ」

「暗殺……ですか？」

ここで皆本はなにか違和感に襲われた。

玖珂の表情は疑問の色を見せたからである。

「だつてお前は平瀬を暗殺しにきた暗殺者なんだろ？」

「なんで僕が平瀬ほたるを暗殺しなくちゃならないのですか？」

「え？」

「一年七組に平瀬を狙う暗殺者が潜入してるんだよ」

玖珂はどうやら暗殺者がクラスに潜入していることを知らなかったようである。

「平瀬さんの暗殺計画？　今、平瀬さんに死なれては我々としては大変困ります」

「勘違いだったのかよ、まったく紛らわしいぜ」

皆本はホッとしていた。もしかしたらこの場で戦闘が行われる可能性もあった。

平瀬の家の前で。

平瀬の目の前で。

「で、どうして皆本に電話したんだ？」

「それは皆本さんを仲間につけいたほうが姫路さんに接触しやすいと思ったのです。トクラの名前を出したのはそうすれば追いかけて来るだろうと考えたからです」

「おれたちトクラは一応政府側の人間だぜ？ テロリストがおれたちと仲良くしていいのかよ」

「最初は戦闘は避けられないと思っていましたが、どうやら状況が変わったようです。われわれは平瀬さんに死んでもらっては困る。あなたがたも同じ、つまりわれわれは利害関係が一致しているので」

「それは仲間になれってことか？」

「一時的に手を貸しあう、ということですよ」

相澤は玖珂を睨んでいる。玖珂は相澤に微笑みかけている。

皆本は久我と相澤のやり取りを見ていて思った。どうにも二人は犬猿の仲のようだ。

政府の要人を殺してきたテロリスト。

政府の要人を守ってきたボディーガード。

まったく別の考え方だがお互いに日本を想っている。日本の未来を考えている。

皆本は日本の未来にかかわることなどできない。なににもできない。だから早く大人になりたかった。日本を変えることのできる大人に。

しかし彼らは皆本と同じ十五才。少年と呼べる年代の、皆本と同じ年代の少年たちは日本を変えようと、もしくは日本を守ろうと動いている。

皆本は何もせずただ時間を無駄に浪費しているだけだった。

しかし彼らを見ると、自分にもなにかできるのではないか、変われるのではないか。そう思った。

ただの希望的観測だ、と皆本はため息をつくのだった。

彼のルール？

学校から帰宅し、平瀬は思わずベットになだれ込んだ。

普段なら制服のままベットに入ることなどない。スカートにしわがついてしまうからだ。

今日に限ってそのようなことをしてしまったのはきつと疲れたからだろう。

やはり着替えようとベッドから起き上がるとなにやら外から声がした。

窓の外を見ると家の前で少年三人が言い争いをしていた。

しばらく続いた喧騒のあと三人のうち二人は帰ったようである。うちの一人はなぜか家の中に入ってきた。

平瀬は彼を迎え入れるため玄関へ向かった。

そろそろ梅雨に入るだろうという六月の放課後。皆本は中央に机があるだけとなんと狭い教室にいた。

そこにいるのは皆本を入れて四人の男女である。

「皆本はわかるけどなんでこいつがここにいるんだよ」

相澤の機嫌は悪い。原因はこの男、玖珂である。

「僕はあなたと一緒にいたくはありません。皆本くんがここにいてから仕方なく、いるだけです」

「まあまあ二人ともやめなつて、仲間なんだから」

皆本が思わず仲裁に入る。

「ところでこの教室はなんなの？ なんだか使われてない教室ってかんじだけねど」

「ここは上層部をお願いして用意してもらった、いわゆる部室ってやつですね」

「トクラってなんでもありなんだね」

「一応政府所属の組織ですから」

部屋の中央には四つの机と椅子があった。教室にあるのと同じ、ごく普通の机である。

床に目をやると、この教室が普段使われていないことがわかる。掃除されてない。

部屋の大きさは普通の教室の半分ほどである。決して綺麗な部屋とは言いがたい。

「ここに集まってもらったのは他でもありません。エージェントの対策を練るためです。なのでなるべく情報を共有し、エージェントの正体を突き止めましょう」

姫路はなにやらはりきっているようだ。なにかいいことでもあったのかしれない。

それは朝のお茶の茶柱が立っていたのかもしれないし、雨上がりの虹を見たのかもしれない。

そんな些細なことで幸せな気分になるのは自分だけか、と皆本は考え直した。

「この中でエージェントに接触したことがあるのは皆本くんだけだそうですね。皆本くん、そのときの様子を教えてください」

「接触って言っても隠れて見てただけだね。えっと、入学式の日の放課後、七組の教室で二人の男女が暗殺がどうのこうのって話をしていたんだ」

「どんな容姿をしていましたか？」

「男の方はおれの立っていた位置からは見えなかったし、女の方は後ろ向いていたから顔は見てないな。うちの制服着てたことは間違いないけど」

「声はどのようなものだったのですか？」

「んー特徴のない普通の声だった気がする……。もう二ヶ月近く前のことだからよく思い出せないけれど」

衝撃的な出来事のわりに詳細は思い出せなかった。あの時は暗殺計画で頭がいっぱいだった。

「そもそもなんで皆本は入学式の日の放課後に教室に行ったんだ？」

入学式は午前中で終わるはずなのに放課後まで教室に残っているのは確かに不自然である。

「それは電話がかかってきたからだよ」

「電話？」

「そう、教室に来て、男の声で」

平瀬と学校から帰っていた時、突然携帯が鳴ったのだ。

「おかしいですね」

「確かにおかしいです」

「なにが？」

「正体を隠すべきエージェントがなぜ皆本くんの携帯に電話をしたのですか？」

「暗殺計画を皆本に知らせる必要があった？」

「なんでおれに知らせる必要なんてあるのさ」

皆本はごく普通の高校生。警察に言うならともかく、彼に暗殺計画を知らせる理由など想像がつかない。

「もしくは電話の主とエージェントは別人の可能性もあります」

「つまりリークした人間がいるってことか」

「エージェントと対立する組織でもあるのかな」

「今のところそういう情報は入ってきていませんね」

「わからないな」

皆本はウーンと唸りながら机に突っ伏した。謎が多すぎる。

もしエージェントに対立する組織がリークしたきたとして、なぜ相手が皆本なのか。

「話は変わりますが、僕から質問をさせていただいてもよろしいでしょうか」

まるで先生に質問をする生徒のように玖珂が手を上げた。

「なぜトクラは平瀬さんの護衛にあたってているのですか？」

トクラは政府の組織。そして平瀬は日本政府を壊滅させるべく活動をしていた元テロリストである。確かに対立することはあっても保護する理由はない。

「わたしたちは下っ端なので詳しいことは聞かされてません。ただ彼女を守れと」

「トクラの上層部は平瀬ほたるが蛍火のリーダーだと知っているのですか？」

「なんでそんなこと気にするんだ？」

「大事な質問です。もし上層部が知らなかった場合、真実を知った時、平瀬ほたるの殺害を命じてくる可能性があります。蛍火のリーダーは影響力が強すぎます」

「もともと知っていた場合は、上層部はなにか姫路たちに重大な事実を隠しているってことだね」

みんな姫路を見る。この場のリーダーは姫路だ。誰が決めるわけでもなく他の三人はそう思っていた。

「上層部が平瀬さんが蛍火のメンバーだと気付いていないとは考えにくいです。しかし万が一に備えて、このことは上層部には内密とします。」

「これからどうする？」

「暗殺者を探し出してつづけます」

「優等生が言うセリフとは思えないぜ」

「ひやかさないでください。高校生活が始まって二ヶ月近くが経過しています。そろそろエージェントはターゲットに接近してきます」

「つまり平瀬のまわりをうるちよろしているやつらはとりあえずつぶすってわけか」

「それは極論です。この高校は一般人の生徒がほとんどです。行動は慎重にお願いします。」

姫路はそれぞれの目を順に見て言った。

「それでは解散します」

皆本たちは立ち上がった。

まだ謎は多い。しかし、皆本は充実感に満たされていた。

今までの生活はやりたいこともなくただ怠惰にすごしてきた。

だが今は違う。やるべきこと、明確な目的がある。

平瀬を守る。なんとしてでも。

彼のルール？

「姫路のやつ機嫌よかったな」

部室からの帰り道。皆本は相澤と帰路を共にしていた。

「相澤が気付いていたとは……」

「おれをなんだと思っっているんだ！」

今日の姫路が機嫌がよかったのはわかりやすすぎだが。

「仲間が増えて嬉しいんだろうな、きつと。ずっと一人で任務にあたってきたから」

「一人？ 相澤がいるじゃないか」

「おれが任務に参加したのは今年の春からなんだ。つまり二ヶ月ほどだぜ。中学の時は姫路一人」

「ずっと一人だったのか。中学生の女の子が誰にも秘密を漏らすこともできず、辛かったのではないだろうか。」

「いや、彼女もプロだ。そんな感情はとうの昔に捨ててきたのかもしない。」

「じゃあ相澤が姫路と知り合ったのは最近なの？」

「名前だけは知っていたぜ。あいつは有名だったから」

「有名だったのか姫路」

「ああ、いくらトクラと言えども中学生が潜入捜査、つまり最前線にいるなんて通常なら異常だからな」

姫路は優秀だった。皆本が知っている姫路は勉強もでき、教師からも好かれ、友人からも好かれるような模範的な優等生だ。

トクラ内でもそれは同じだった。

姫路の頭の回転は速い。常に先を見越した行動を取る。

ただ、規則を重んじる姫路と破天荒な相澤とでは相性がいいとは思えないが。

だからこそそのコンビなのかもしれない。

「姫路に初めて会ったのは今春の研修の時だ」

「トクラは研修なんてあるのか」

「研修と言っても勉強会みたいなものだぜ？ トクラには戦闘訓練がないからな」

「保安部なのに戦闘訓練がないのか。それで人を守れるのか？」

「さあ？」

「さあつて！ いいのかよそんなんで」

相澤は前を向いていたが、どこか遠い目をしていた。なにか遠い記憶を思い出しているのかもしれない。

「おれたちは特別な人間じゃない。特殊な人間の集まりなんだ。一つでも才能に突出していればいい。若いつてだけで、もうそれは才能なんだぜ」

相澤は今までどのような人生を送ってきたのだろうか。平坦ではないだろう。この年で特殊な仕事をしているのだから。

聞いたら答えてくれるだろうか。

聞いたところで意味の無いことだと皆本は考えを引っ込めた。

「なあ一つ聞いていいか、相澤」

「なんだ？」

「平瀬は元テロリストだった。言ってみれば政府の敵だろ？ それでも守り続けるのか？ お前は姫路と違って上層部の意見なんてきかなそうだけれど」

「上層部の意見なんてのは関係ない」

相澤は歩みを止めた。皆本が前に出た形になる。

皆本は後ろを振り返ると相澤はいつになく真剣な顔をしていた。

「おれの世界にあるルールはたった一つだ。おれを誰も強制することとはできない。たった一つのルールを守り続ける。だからおれは平瀬を守る」

相澤はシンプルだった。彼の中にはたった一つしかルールがないのだから。

彼はルールに縛られない。

だがそれは所詮他人の定めたルールだ。

彼は自分の決めたルールに従う。

そのルールとはなんなのか皆本には想像もつかなかったが、それが人としての理想的な生き方のような気がした。

それは国の理想的な形のような気がした。

光が差した。

眩しすぎて、皆本には直視することができなかった。

直視することが許されないのかもしれない。

感情

今日の授業も終わり、クラスメイトは帰宅したり、部活へ向かう中、皆本はまだ教室に残っていた。

特にやることがあるわけではない。平瀬が帰らずに未だに教室に残っているからだ。

相澤と姫路は平瀬が下校しない限り、今日の任務を終了できない。彼らは校内での活動のみが許されている。逆に平瀬が校内にいる限りは活動し続けなければならない。

二人の姿は見えないが、隠れて平瀬を護衛でもしているのだろう。教室には皆本と平瀬しかいない。

皆本は放課後の作戦会議のため、姫路たちが戻ってくるのを待っていた。

その間、やることもないので教科書をひるげ、明日の英語の予習なんぞを試してみたりする。

すると沈黙を守っていた平瀬が声をかけてきた。

「ねえ、皆本くん。放課後の教室に年頃の男女が二人きりなのに、あなたはなにもしてこないのかしら？」

「お前になにもする気は起きないよ、平瀬」

正確には二人きりではない。姫路たちがどこから見ているのだから。

「それは意気地がないと判断してもいいのかしら？」

「クラスメイトの女子高生を襲わないのが意気地がないというのはおかしい話だと思うよ」

「鈍感ね。わたしは襲えと言っているのに」

ノートから目を離し、顔を上げるといつのまにか平瀬は皆本の机の前まで来ていた。

相変わらずの意志の強そうな目。しかしよく見ると今日の彼女は化粧をしていた。

なにか特別なことがあるのかも知れない。もしかしたらないのかもしれない。どうでもいいことだが。

彼女のくちびるは妙に潤っていて、柔らかそうで、触れたら消えてしまいそうだ。

平瀬はクスッと笑った。

「この体も胸も、くちびるだってあなたの好きにしているのよ」

教室には夕日が差し込んでいる。梅雨が明ければ夏が来る。きつと今年の夏は暑い。

平瀬は左側から太陽の光を受けて、オレンジ色の光を体が反射している。夏服を着ている彼女は腕も足もある程度露出している。

「おれがお前のことどう思っているのか知っていて言っているのか？」

「知っているわ。きつとわたしとあなたは同じ気持ちでいるに違いないのだから」

殺したいほど憎んでいる。

どう？あつてる？と、彼女はいたずらな笑顔を浮かべた。

「ああ今すぐにでも殺したいな。お前を憎いと思わなかった日はない」

「わたしたちはきつと結ばれない運命にあるのね」

「来世では結ばれるかもしれない」

「わたしたちが来世でもう一度出会えるとは限らないわ」

「きつと会える。きつと探し出してみせるよ」

「神様が二人を引き裂くかも知れないわ」

「そんな神様いらない。神様を殺しておれが神様になる。そして奇跡を起こしてみせるよ」

「あら、頼もしいわね。神様になれるんだったら現世でわたしの罪を消してみたらどう？ 来世で奇跡を起こすよりもずっと簡単だと思っけれど」

「きみの罪は消すべきじゃない。死ぬまで罪を背負って生きていくんだ。それがきみの償いさ」

「一生か……。神様はわたしを救ってはくれないのね」

「おれが神なら、現世で殺して来世で救う」

「あなたの罪はどうなるの？」

「おれはただいま絶賛罪滅ぼし中だ」

皆本は再びノートに目を落とし、シャーペンを走らせ始めた。

「そう、罪を償った来世のわたしはあなたと結ばれるってわけね」

平瀬は誰に言うわけでもなくそう呟いて、教室を出て行った。

「一番簡単な方法はお互いがお互いを許せばいいんだ」

それは決してできないだろうと、皆本はため息をついた。

疑惑？

二限目と三限目の休み時間。皆本の席に玖珂が近づいてきた。

彼が世間話をするために来たとは思えなかった。そつと皆本に耳打ちした。

「平瀬さんの方を見てください」

平瀬に目をやる。席替えをし平瀬は前方の入り口の近く、一番前の端の席だった。

彼女はクラスメイトと会話をしている。なにも知らない人間が見れば気にも留めないような日常の風景。

しかし、皆本たちは違った。皆本は常に平瀬を監視していた。彼女に話しかける生徒は少ない。

腰にまで届くほど、高校生にしては珍しい長い髪。理知的で意思の強そうな目。皆本がどこか平瀬に似た雰囲気を感じ取った黒髪の乙女。

平瀬と会話していた人物は麗野だった。

「麗野がエージェント」

「可能性はあります。しかし麗野さんはクラスで浮いている平瀬さんを不憫に思つて声をかけたのかもしれないが」

平瀬は一人が寂しいなどという思考は持ち合わせていないだろう。強い女だ。皆本の他にそのことを知る人などいないだろうが。

「麗野さんがエージェントかどうか確かめましょう」

「正面から暗殺しに来たんですか、とでも聞くのか？」

「僕に考えがあります」

玖珂はニヤつと口角をあげるいやらしい表情をした。

四現目。男子は校庭で体育の授業を受けていた。

「飯の前に運動させられるなんて拷問だぜ」

相澤は頭の後ろで手を組みながら、不平をこぼしている。

今日は短距離走だった。レーンは三つ。皆本たち男子はそれぞれのレーンに列を作る。

「相澤くん、僕と勝負しませんか？」

玖珂が好戦的な態度をとるのは珍しい。いや、これが本性なのかもしれないが。

「やってやるうぜ！ 負けたほうがアイスおごりな！」

「購買部のデラックスメロンパン」

「くっ、いいだろう」

デラックスメロンパンとは購買部で一番人気の菓子パンだ。競争率が高く、手に入れるには大変に困難である。

四限目の授業を途中で抜け出せば買えないことはない。教師に齒向かう勇気があればの話だが。

もし暗殺計画など知らなければ毎日こんなくだらない学園生活を送っていたかもしれない。

もう穏やかな生活には戻れない。なんとなく皆本はそう感じていた。

スタートの合図が出る。相澤と玖珂は同時に足を蹴りだす。

どちらが勝つかなんて勝敗に興味などなく、皆本は天を仰いでいた。

今日は空がきれいだ。よくないことが起きるかもしれない。

「相澤くん！」

玖珂の声に皆本は意識を戻した。レーンの向こう側で相澤が倒れていた。

急いで相澤に駆け寄る。

相澤は汗がひどく、うずくまっていた。意識はあるようだ。

他のクラスメイトも集まり、彼らをかき分けるように体育教師もやってきた。

「先生！ 僕が彼を保健室まで運びます。皆本くん手伝ってください」

「うん、わかった」

玖珂は相澤に肩を貸し歩き始めてしまう。皆本も急いで後を追う。相澤は苦痛の色を浮かべている。

皆本は相澤の上履きを下駄箱から出すため先に校舎に入った。しかしそんな気遣いは意味が無かった。

後ろを振り向くと玖珂は肩を貸すことをやめていた。

相澤は一人で立っている。先ほどとはまったく別の表情で。

「急いで教室に向かいますよ」

「時間がないからな」

廊下には授業中のため生徒は一人もいない。二人は臆することもなく、誰もいない廊下を走って行ってしまふ。

「演技だったのか」

皆本はひとりつぶやいた。

疑惑？

皆本が教室に入ると二人がかばんを漁っているところだった。

そのかばんの持ち主は麗野である。

「女の子のかばんを漁るなんてやめなよ」

「人の命がかかっているんだ。これは好きでやっているわけじゃない」

相澤はたいして悪びれた様子も無い。

かばんの中は数？の教科書、ノート、筆箱、携帯電話、巾着袋。

相澤は巾着袋を取り出した。ピンクの布でできたかわいらしい巾着袋。大きさは両手で覆えるほどか。紐で縛られて中身はわからない

「相澤、おれは知っているぞ。女の子の巾着袋を開けてはならない。つておい！」

相澤はすでに紐をほどいていた。皆本の心配は杞憂に終わり、仲から出てきたのはビー玉だった。

相澤はすぐにビー玉を袋に戻し、かばんのチャックを閉めた。そして机の脇にかける。

「麗野がエージェントだつていう証拠は出なかったね。手がかりがなくて残念だけれど麗野の疑いが晴れてよかったよ」

麗野はクラスで浮いている平瀬に話しかけただけだったのだ。心優しい女の子だ。彼女が人殺しなわけがない。

「間違いないな」

「ええ、間違いありません。彼女がエージェントです」

「なんでそうなるんだよ！ 彼女のかばんからは人を殺す道具なんてなかっただろ」

「暗殺者がわかりやすい武器なんて持ち歩くわけがないだろ」

「まさかシャーペンの芯が毒針なんて言うんじゃないだろうな」

「武器を隠した所でプロの目はごまかすことはできません。すぐにばれます。麗野さんがエージェントだという証拠はビー玉です」

「ビー玉？ そんなもので人を殺せるわけないだろ」

「でこピンの要領で中指で高速で眼球に打ち込めば脳まで届く。十分に人を殺せるぜ」

「少林寺拳法の指弾と呼ばれる秘儀です。麗野さんが指弾の使い手だったとしても何の不思議もありません」

拳銃ではなくビー玉なら持っていて不審には思われにくい。まさに暗殺用の暗器だ。

「でこピンで人を殺せるのか。恐ろしいな」

「並大抵の握力じゃない。相当な鍛錬を積んだんだろうが潜入においてはてんで素人だな」

相澤は人を馬鹿にするようなせせら笑いをした。

「女子高生がビー玉なんて持ち歩くはずがないだろ。現代の女子高生をもっと観察すべきだったな」

「とにかく、麗野さんがエージェントでほぼ間違いないでしょう」

「どうする殺すか？」

「麗野さんを殺すのか！」

相澤は感情のない声だった。まるで人を殺すのになんの抵抗がないようだ。普段の彼からは想像もつかない。

思わず皆本は声を荒げてしまう。

「麗野さんを殺害するのはまずいでしよう」

どうやら玖珂は常識人のようだ。いくら暗殺者だからといって麗野は女の子だ。女の子を傷つけるのはどうも気が引けた。

「麗野さんを殺してしまうと手がかりを失います。皆本くんの話の間限り暗殺者は最低でも二人以上います。」

ですから生かして捕まえて、拷問にかけます。殺すのはもう一人の仲間について話していただいた後です」

忘れていた。玖珂はテロリストだった。手段を選ぶような人間ではない。

麗野が情報を持っていなかったら平気で殺してしまうだろう。

「姫路に報告して作戦を練ろうぜ。もしかしたら今日中に片付くか

もしれない」

事態は急展開をみせた。

その日の空は雲ひとつない晴天だった。

縁起のいい事は起きそうもない、と皆本はため息をついた。

放課後。まだ生徒がまばらに残っている教室で皆本たちは姫路の作戦に耳を傾けていた。

「麗野さんを一人になった隙を狙って拘束します。ですのでこれから麗野さんを尾行します。相澤さんと皆本さんは麗野さんを後ろから尾行してください。わたしは前につきます」

「前から尾行なんて聞いたことないぞ？」

「後ろからの尾行は気づかれた場合逃げられる可能性があります。その時、前に仲間がいればはさみうちにできますよね」

姫路は麗野の自宅、さらには帰宅ルートが頭に入っている。だからこそ可能な作戦だ。

つまり姫路、麗野、相澤と皆本の順で常に麗野をはさんだ状態で尾行することになるのだ。

「僕はどのようにすればいいのでしょうか」

「玖珂さんは麗野さんの自宅付近にいてください。万が一逃げられた場合、麗野さんは自宅に向かう可能性が一番高いですから」

「それで周りに人がいなくなったタイミングを狙って捕まえるわけだな」

「そのタイミングについては前方を歩いているわたしが合図を出します」

皆本はテレビなどの影響でなんとなく無線を使い、インカムで通信し合うイメージがあったが違うらしい。どうやら携帯電話で連絡を取り合うようだ。

インカムをつけていると敵に見つかった場合言い逃れができない。さらに無線は傍受される危険性がある。

高校生が道を歩きながら最も不審に思われない通信手段はやはり

携帯電話だった。

麗野が席を立ち、教室を出て行ったとき、皆本たちも立ち上がった。

「作戦開始です」

麗野拘束作戦が始まった。

拘束作戦一

相澤は皆本とともに麗野を尾行していた。

麗野との距離はおよそ五メートルほどか。五メートルという距離は近すぎると思われがちだがこれでいい。

相手がプロの場合、遠くから隠れて尾行するよりもあえて姿をさらしたほうが警戒されにくい。

麗野とは顔見知りだ。帰宅中にクラスメイトが後ろを歩いていてもなんの不思議もない。

「本当に麗野がエージェントなのか？ 普通の女子高生にしか見えないんだけど……。それにビー玉持ってただけで疑うってのもおかしいよやっぱり」

皆本はもし濡れ衣だったらと心配そうである。

ビー玉を持っていてる女子高生などいないと断言した相澤だったが、それだけで確証を得たわけではなかった。別にも根拠はある。

「いや、間違いなく麗野はエージェントだ。前の麗野を見てみる」
皆本は麗野を凝視していたが、しばらくしてお手あげだとも言わんばかりの表情で相澤を見た。

「麗野はおれたちがいつ襲ってきてても對抗できるよう、常にこちらを警戒している。歩き方でわかるんだよ。訓練を積んでいる人間の歩き方だ」

ただの女子高生があんな隙のない歩みをするわけがない。

しかし麗野は実戦の経験値が絶対的に足りないようだ。さらに致命的なミスを犯している。

敵は後方の二人だけではないのだ。

麗野はこちらに警戒心を向けすぎて姫路がノーマークになっている。

敵が複数の場合の訓練を受けていないのかもしれない。

仕事か暗殺ならば一対多数になることなど想定に入れていないの

かもしれないが。

「おれから見れば普通に歩いているようにしか見えないけれど……」

「今回の作戦は楽勝だな」

「油断するなよ。実戦経験は少ないかもしれないけれど、相当腕の立つ暗殺者には違いないんだろ？」

「おれを誰だと思ってるんだ？」

相澤の家系は祖父の代から保安部に勤めていた。当然彼も将来保安部に勤めるんだろうと、漠然と考えていた。

相澤の父は仕事が忙しく、遊んでもらった記憶などほとんどなかった。いつも相澤をかわいがってくれていたのは祖父だった。

相澤は祖父から保安部に必要な技術を全て叩き込まれていた。

友達と遊びもせず、毎日毎日鍛錬の日々。しかし相澤はそれを不満に思ったことなどなかった。

祖父から、そしてなにより父から期待をされることが嬉しかった。相澤は才能の片鱗をすでに見せ始め、家族の期待に確実に応えていた。

相澤が中学生になってしばらくたったころ、珍しく父が特訓を見てくれることとなった。

懸命に父に普段の鍛錬の成果を見せる。

相澤は自信があった。事実幼少のころから鍛錬を積んでいる相澤は強かった。しかし父の言葉は意外なものであった。

そんな程度では誰も守れやしない。

父に認めてもらうことはできなかった。

父の発言は納得いかなかった。確かに実力不足かもしれない。

だが相澤はまだ中学生になったばかり、保安部になるのはまだまだ先の将来ことで人を守る必要などまだないはずだ。

しかしその将来は意外にも早く訪れることとなる。

祖父から特殊警邏隊の存在を聞かされたのだ。

中学生でも所属することのできる保安部直属の秘密組織。トクラ。

彼が入隊するのに時間はかからなかった。

相澤は自信に満ち溢れていた。自分のように生まれた時から鍛錬を積んでいる人間などいるはずがない。トクラに入れば大型ルーキーとして扱われ、すぐにでも前線で使ってもらえる。そうすれば父を見返してやることができる。

この自信もすぐに打ち砕かれることとなる。

トクラには体術使える者などほとんどいなかったのだ。しかし、相澤が大型ルーキーとしては扱われることは無かった。

そもそもトクラは特殊な任務を遂行する組織であって、人を守る保安部のような任務はなかった。

中学二年。潜入捜査の選抜があった。任務はやはり特殊なもので中学生から選ばれるのだった。

いくらトクラといえども中学生で最前線にでることは稀だ。

相澤には思ってもいないチャンスだった。

しかし選ばれたのは相澤と同じ年の少女だった。相澤より少女のほうが勝っていた。

ただそれだけのこと。

「相澤？ なあ聞いてた？」

皆本の呼びかけに我に返る。慌てて皆本の方を見る。

「悪い、聞いてなかった」

「だから麗野をどうやって捕まえるって話だ。向こうは殺しのプロなんでしょ？ いくら男二人でも捕まえるのは難しいんじゃないの？」

「トクラは一つでも才能があればいいって前に言っただろ？」

「言っていたね」

「おれは体術が得意だ。だからこそ今回の任務、姫路とパートナーに選ばれた」

「相澤は強かったのか！」

「一応保安部本隊を希望していたからな、昔の話だが」

そう、保安部本隊を目指していたのはもう昔の話だ。今はトクラで頑張ると決めたのだ。姫路とともに。

「じゃあ姫路もなにか特技みたいなものがあるの？」

麗野が角を曲がり視界から消える。相澤たちは歩幅を変えることなく自然に歩き続ける。

「あいつはコミュニケーション能力が高いから、潜入捜査には向いているだろうな。任務とは関係ないかもしれないけれど、すごいこと二人はそこで会話が終わった。終わらせられた。

角を曲がったその先に、目の前を歩いていたはずの麗野が倒れていたのだ。

急いで皆本たちは麗野にかけよる。姫路はすでにそこにいた。

姫路は呆然と麗野を見ていた。

麗野は仰向けで倒れている。人が仰向けで倒れるなんてことはほぼない。

麗野は死んでいた。

麗野の眉間には弾痕があった。拳銃かなにかで射殺されていた。暗殺者拘束作戦はあっけなく失敗に終わったのだった。

「まさか姫路がやったんじゃないだろうな」

「待つてくださいわたしじゃありません」

「撃たれたのは前方の顔の眉間。麗野の前にいた人間にしか殺せなはずだ」

「信じてください！ わたしじゃありません！」

「待つてくれ、相澤。姫路は犯人じゃない」

「身内だからってかばうことはないんだぜ？」

「弾痕の跡を見てみてよ、上から弾が入っていつている。麗野よりも身長の高い姫路には犯行は無理だ」

相澤はもう一度麗野の顔に残る弾痕を確認する。どうやら納得のいったようだ。

「疑ってわなかったな、姫路」

「いえ、疑いが晴れたのならそれでいいです」

「それにしても手がかりがなくなっちゃったな。エージェントはもう一人いるってのに」

「とりあえず死体をどうしよっか。まさかこのままってわけにはいかないだろうし」

「上層部に指示を仰いでみます」

姫路は携帯電話を取り出しどこかに電話をしているようだった。

どこかというのはもちろん上層部なのだろうが。

それからしばらくして姫路の電話が終わった。どうやら死体の回収は上層部の方でやってくれるらしく皆本たちはその場を立ち去ることにした。

また謎が増えてしまった。なぜ麗野は殺されたのか。

仲間割れ。対立組織の仕業。

いろいろ思いついたが所詮机上の空論だ。証拠などない。

その日は解散となった。

もう六月も終わる。本格的な夏が始まるうとしている。

あの嫌な夏が。

拘束作戦二

皆本は再び麗野が殺害された場所に立っていた。今は一人だ。

一人の方が考え事に集中しやすい。一人の方が気が楽だ。だから家を出た。平瀬から離れた。

言い訳だな、とため息をつく。

皆本は今日起きた麗野の殺害について考えていた。

麗野の死因は射殺だ。それは外傷から間違いはなかった。眉間に弾痕があった。

麗野が倒れた方向から考えて皆本たちから見て前方から狙撃されたに間違いは無い。前方にいたのは姫路一人。

しかし姫路に犯行は無理だ。なぜなら麗野は上から撃たれていた。麗野よりも身長の高い姫路には殺しようがない。

それに加えて、姫路には麗野を殺すだけの理由がない。

麗野に死なれてしまったのはエージェントの手がかりを失ってしまったからだ。

もっとも考えられるのは遠方からの狙撃だ。

皆本は周りの建物を見渡した。

ここは住宅街であり高い建物はない。せいぜい二階建てだ。

麗野の眉間の弾痕がどの角度から撃たれたものだったか正確には記憶していなかったが二階から撃たれた事は間違いのないように思えた。

遠方から狙撃されたのだとして犯人の狙いはなんだったのだろうか。

皆本たちに麗野が捕まる前にもう一人のエージェントが口封じのため殺した？

玖珂のように平瀬を失っては困る組織がいて、そいつらが殺害した？

では玖珂が犯人か？

しかし彼は麗野の自宅付近にいたはず。だがそれを証明できる者はいない……。

玖珂は皆本たちと手を組むまでエージェントの存在を知らなかった。麗野殺害のタイミングとしては一致する。

だが、麗野を拘束しようと言いだしたのは玖珂だ。

玖珂が麗野を殺害しようとしていたのなら、最初から殺害を提案すればいい。これは明らかに不自然。

なんだ？ なにかがひっかかっている。

麗野の殺害される前。

相澤との会話。

「そうか」

皆本は誰もいない住宅街で一人つぶやいた。人影はなく、日はすでに落ちていた。

街灯の明かりだけが皆本を照らしていた。

「ピースはそろった。あとはパズルを解くだけか」

この謎を解いたところで誰も幸せにはなれないかもしれない。

だが助けを求めている者がいる。

助けを求めているものには救いの手を差し伸べるべきだ。

「一人を救った程度じゃあ、おれの人生は報われない。全員まとめて救ってやる」

真実書

相澤は平瀬を帰宅するのを見届けると再び校舎に戻ってきていた。目的地は部室だった。普段なら集合をかけるのは姫路だったが、今日は皆本がみんなを集めたのだった。

相澤は足早に廊下を歩く。

麗野殺害から姫路はだいぶ落ち込んでいた。

彼女は人の死体を見るのは初めてだろう。しかも殺された死体だ。もしかしたら任務続行は不可能かもしれない。パートナーが変わるのは残念だが、姫路が悲しい顔をしているのは見ていられない。

相澤はそんなことを考えながら部室の扉を開いた。

部室のなかには三人の人間がいた。姫路は椅子に座っているがうなだれていて顔が見えない。

玖珂は相澤がそちらを見ると申し訳なさそうに笑ったのだった。

皆本は壁に寄りかかっていた俯いていた。

相澤は扉を閉め、立ったままみんなに話しかける。

「遅くなったな。で、なにか話し合ってもあるのか」

「今日集まってもらったのは麗野殺害の件だ」

「そうでしょうね。エージェントの手がかりを失ってしまった。これは大問題です」

「手がかりはあったんだ、もう麗野殺害の犯人はわかっている」

「なんだって！」

相澤は思わず皆本に歩み寄ってしまった。

「犯人はもう一人のエージェントだ」

「つまり我々に仲間が捕まりそうになり情報が漏れるのを恐れて口封じをした、というわけですか」

「ちよつと待て！ 犯人がエージェントなのは納得がいくが一つ疑問点がある」

相澤は話に割ってはいる。

「遠方から狙撃するにしても狙撃ポイントがないんだ」

「麗野さんが殺害された付近は住宅地です。どこかの家から狙撃すればいいではないですか」

「あの一帯は一軒家ばかりで古くから住んでいる住人しかいない。そしてアパートなどもない。」

「エージェントが活動し始めたのが今年に入ってからだとして、その期間にあの付近で引っ越してきた人間などいない！」

「どこかの一軒家に忍び込んでそこから狙撃すればいいではないですか？」

「暗殺の専門家がわざわざそんな証拠の残りそうなことするか疑問だぜ」

「狙撃自体が困難だったというわけですか……」

「そんなの簡単だよ、犯人は道のと真ん中にいて麗野を銃殺したんだから」

皆本が言った。

「ど真ん中ってあの時あの道はおれたち以外誰もいなかったら？」

「……！」

「そう、たった一人いたんだよ、麗野の前方にいて麗野を殺害可能だった人物が」

「まさか姫路さんが犯人だともいうのですか！」

「姫路には無理だってあの時皆本だって断言していただく！ 麗野は上から撃たれていた！ 麗野より身長の高い姫路には無理だって！」

「確かに姫路の身長は低い。だけどそれは立っていた状態の場合、麗野はあの時しゃがまされていたんだよ！」

「確かにそれで辻褄は合います。でもそれでは皆本くんの話が正しいとするならば、姫路さんがもう一人のエージェントということになりますか……」

「そうだよ、姫路がもう一人のエージェントだ」

「ちょっと待てよ！ 姫路は平瀬を中学生の時から守ってきたトクラだぜ？ なんで平瀬を暗殺しなくちゃいけねーんだ？ なっ姫路！ 言い返せよ姫路！」

姫路は俯いたままにも話そうとはしない。

皆本は姫路に言葉を畳み掛ける。

「なぜ入学式の日、初対面のはずの麗野のことを知っていた！ 仲間だったからだろ？ なぜおれたちが玖珂をエージェントだと疑った時、たいした根拠もなく否定した？ 自分がエージェントだからだよな？ なぜ麗野拘束の時前方の配置を自分にした？ 本来なら戦闘力の一番高い相澤がそのポジションのはず！ 麗野を殺害するのに麗野の前方にいないければならなかったからだろ？」

「皆本よせ！ 姫路は人を殺せる奴じゃない。人を傷つけるような奴じゃない」

「相澤だつて気がついてるんだろ？ 姫路がエージェントだつて」

「そんなわけないだろ！」

「ならなんで姫路がエージェントじゃないもつとも有効打になる証拠を言わない」

相澤は言いよんだ。皆本から目をそらす。

「おれが入学式の日、教室で見たのは二人組みだった。男女のな！」

「そうです！ エージェントは男女の二人組みのはず。女生徒は麗野さんで間違いはありません。ならばもう一人のエージェントは男子生徒。姫路さんはエージェントではありません。なぜそこを指摘しないのですか相澤くん！」

相澤はなにも答えない。答えることなどできるわけがない。

「おれはエージェントを実際に見たわけじゃない。男だと思ったのは声を聞いて男だと思っただからだ」

「まさか姫路さんが声を低くして話していても言うのですか？ いくら声を低くしたところで皆本さんが勘違いするほどの声を姫路さんが出せるとは思いませんが」

「ずっと引つかかっていたんだよ、麗野が殺害される前の相澤との

会話が」

「おれとの会話？」

「トクラはなにか一つでも優れる技能があればいい、相澤は体術。姫路はなんなんだ？ あの時相澤はこう言った」

『あいつはコミュニケーション能力が高いから、潜入捜査には向いているだろうな。任務とは関係ないかもしれないけれど、すごいこ』

「途中で話は終わってしまったけれど、あの時こう言おうとしていたんじゃないの？」

任務とは関係ないかもしれないけれど、すごい声が出る。

相澤はなにも発することなく、小さくうなずいた。

「姫路の特技は声を自在に操ることだった。だから男の声を出すことが出来た。おれはエージェントが男女二人組みだと勘違いをした」
沈黙が生まれる。みんなの視線は先ほどからなにも話さない姫路へと向かっていた。

「なんでだよ姫路。なんで平瀬を暗殺なんかしようとしたんだよ！」

姫路は答えない。俯いたまま。

「答えるよ姫路！」

「それはトクラの任務が平瀬さんの護衛ではなく暗殺だったからではありませんか？ そうなんですよね皆本くん？」

「うん、たぶんそうだと思う」

「ちよつと待てよ、おれはなにも聞かされてない」

「たぶん、相澤には聞かされてない、姫路にだけ与えられた極秘任務だったんだろうね」

真実はこうだ。

平瀬が蛍火のリーダーであることは政府も知っていた。しかし、平瀬家からテロリストが出たという事実が公になれば国民の政府に対する印象は悪くなる。

そこで政府は平瀬を逮捕するのではなく、平瀬がテロリストであ

ることごとみ消そうとした。

つまりトクラは平瀬を護衛するためではなく、平瀬の監視が任務だったのだ。平瀬が不穏な動きを取ればすぐに殺害できるように、姫路を平瀬の近くにおいていた。

状況が一変したのは今年に入ってから。東京で活動しているはずの『日本の夜明け』のメンバーである玖珂がこの町にやってきた。

もちろん玖珂の目的は平瀬を仲間に取り入れること。

平瀬は螢火の元リーダーであり、影響力も相当大きい。そこで政府は平瀬ほたるの暗殺計画を実行に移した。

麗野はおそらく政府の人間ではなく暗殺専門の組織の人間である。政府側に暗殺の専門家などいるわけがないだろうから、外部組織に依頼したのだろう。

日本政府直轄の保安部が外部組織に依頼を出せば、事が公になった場合言い逃れができない。そこで秘密組織である特殊警邏隊が外部組織に依頼することになったのだろう。

事が公になったところで政府はトクラを切り捨てる計画だったに違いない。トクラなどという組織は政府の組織ではないと言い張って。

姫路たちはしよせん使い捨ての手駒だったのだ。

姫路は皆本たちに正体がばれそうになったため麗野を殺害した。

これは上層部の判断なのか、姫路自身の独断なのかはわからないが。

「姫路！ 中学の時から平瀬といて情はわかかなかったのかよ！ それともいつでも殺せるように傍にいたのかよ！」

「わたしだって殺したくありませんよ！ 平瀬さんはわたしの一番の親友です！ 殺したいはずがないでしょ！ あなたに何がわかるんですか！」

姫路の怒声が教室に響いた。

「じゃあなんでおれに相談しないんだ！ そんなに頼りないか？ おれたちはパートナーだよ！」

「組織は簡単には変わりません！ 中から変えようなんて考えが甘すぎます！」

「だからおれに助けを求めたんだよね？」

皆本の声は穏やかで優しくかった。まるですべてを包み込む光のような声。

「どういことですか、皆本くん」

「電話だよ。入学式の時にかかってきた電話」

あの時電話がかかってこなければ暗殺計画を知ることなどなかった。

「あれは姫路からの SOS だったんだよね？ わざと計画をリークして自分を止めて欲しかったんでしょ？」

姫路は唇をかみ締めながら頷いた。

「組織の人間が組織を変えるのは困難です。組織に逆らえば殺されてしまいますから。外部の人間に助けを求めようと思った時、真っ先に思い浮かんだのが皆本さんでした。皆本さんならなにかあるかと平瀬さんの味方になってくれますから」

「おれはそんなに強くないよ」

「前にも言いましたが、大切なのは人を守りたいという気持ちです。皆本さんは誰よりも平瀬さんを大切に思っています。だからあなたを選びました」

姫路の目はしっかりとっていた。意思の持った目で皆本を見据えていた。

「迷惑をかけてしまつてすいませんでした。お願いがあります。平瀬さんを守ってください」

姫路は深々と頭を下げた。こんなにも真剣にお願いをされた経験など、皆本には一度しかなかった。

あの時も深々と頭を下げられた。忘れていた遠い記憶。

「おれは姫路を責めようとして真実をみんなに明かしたわけじゃないよ。姫路、きみを救う。おれにできることはそれだけだ」

部屋の空気は一気に和らいだ。

状況は変わってしまっただが皆本たちの目的は変わらない。
平瀬を守る。それだけだ。

真実式

「平瀬さんの暗殺計画を命じられたのは今年の二月。まだ中学生のころでした。上層部は平瀬さんの暗殺が失敗すればわたしを殺すと脅していました……」

姫路は申し訳なさそうに言った。

つまり平瀬を暗殺すれば姫路は助かる。

平瀬を守れば、姫路は組織に消される。

助けられのはどちらか一方。

姫路は平瀬を守ることを望んでいる。自分が死んでもよいのだと。「どうすんだよ、皆本。おれはどっちかが助かってどっちかが死ぬなんて嫌だぜ？」

「平瀬さんを失うのはもちろん姫路さんも失いたくはありません。僕たちは敵同士ですが友人です。どうにかならないのですか皆本さん」

みんなの注目は皆本に集まる。

どちらを選択するか。二者択一。

一方を助ければ一方は殺される。

一方を殺せば一方を救える。

究極の選択。

玖珂は言っていた。日本の夜明けの目的は日本の洗濯だと。

どちらの選択が日本の洗濯になるのだろうか。

どちらかを救い、どちらかを捨てる。

日本はそうやって成長してきた。

なにも失わずになにも得ることなどできない。

そうやって生きてきた。

皆本は決断する。

「両方救う」

皆本にはどちらかを選択することなど出来なかった。

「それつきやないぜ！」

「でもどのようにすればお二人を救えるのですか？」

「簡単だよ。日本政府を倒す」

「はっ！？」

「日本政府を倒せば平瀬を暗殺しなくても姫路が組織に殺されることなんてない。そもそも平瀬の暗殺計画もなくなる。まさに一石二鳥」

「まあ僕は元々日本政府を倒すために活動しているので構いませんが、お二人はどうするのですか？ 政府側の人間が政府を裏切るのですか？」

「わたしは構いません。元々わたしが事の元凶なのですからわたしが参加しないのはおかしいです」

皆本は相澤を見た。目を瞑り考え込んでいる。

相澤の家は代々保安部だと言っていた。その家柄からテロリストが出るなど前代未聞だろう。相澤は家族と縁を切ることになってしまふ。

「相澤さん、強制はしません。あなたはそのままうまくいけば必ず保安部本隊に入れます。人生を棒に振る必要などないんですから」
大きな音が部屋に響いた。相澤は壁を殴った音だった。拳を握り締めている。彼も葛藤しているのだろう。

「お前らが行くって言うてんのにおれが行かないわけないだろ？」

全員助けよう。おれが守ってんのはたった一つのルール、いや信念だ。それだけは死んでもやぶらねえ」

「前から聞きたかったのだけれど、相澤のルールってなんなの？」

相澤はニヤつといやらしい笑い方をした。

「自分の意思是曲げない。一度決めたことは曲げない。平瀬を守って決めた。姫路を守るって決めた。そのためだったらテロリストにだってなつてやるぜ！」

相澤らしいルールだ。彼はそのルールに従って生きてきた。なんて自分本位のルールだろうか。

みんなの意識は高まった。

この場にいるのは四人。真実を知るのはたったの四人。

皆本は教室の外で会話を聞いている人影に気がつくことはなかった。

決意 1

平瀬は放課後の廊下を歩いていった。

一度家に帰ったものの図書館で借りた本を返すのを忘れていたのだ。

明日返しても良いのだが返却予定日は今日だった。約束を破ることなど出来ない。

単に延滞者として図書委員に声をかけられるのが嫌だということもあつたのだが。

図書館は校舎の端にある。普段使っている教室などがある校舎とは反対側だ。

授業をする教室が少ないためか人通りは少ない。なにに使われているかわからないような教室もある。

例えば普段使っている教室の半分ほどの広さしかない教室。もし授業に使うのだとしても中途半端に狭く、一クラス分の生徒も入りきらないだろう。

ちょうどその教室を通り過ぎようとした時、中から人の声が聞こえた。

平瀬は単純に驚いた。この教室にも使い道があつたのだと。

興味本位で聞き耳を立てる。どのような用途で使われる教室なのか気になつたのだ。

中から聞こえてきたのは聞き覚えのある声だった。聞き間違えるはずがない。

平瀬は小さいころからあまり友達がいなかった。

周りには常に人が集まっていたが、平瀬はその子たちを友達とは思えなかった。

みな、平瀬の家柄に集まる者ばかりだった。平瀬の中身を見てくれる友達などいなかった。

姫路は初めての友達だった。

中学二年。平瀬はこの時はまだ東京の実家で暮らしていた。

姫路が平瀬の中学校に転校してきたのは革命が起きた直後、まだ日本政府が完全に立ち直っていない時だった。

転校してきたばかりの姫路は平瀬の家柄など知らなかっただろう。なのに話しかけてくれた。うれしかった。

話しかけたのなんて彼女の気まぐれかもしれない。それでもただ、うれしかった。

姫路はよく笑う子だった。平瀬はあまり感情が豊かな方ではない。自分が笑わない分、姫路が笑ってくれている気がした。

自分の欠けた感情を姫路が補ってくれている気がした。

高校生になつたら実家を出て、誰も知らない土地へ行きたいと言った時、全力で応援してくれた。

それどころか一人にするのは不安だと一緒に付いてきてくれた。

この時はさすがに悪いと断ったが、うれしかった。とてつもなくうれしかった。

自分を心配してくれる人間がこの世にいることが。

そう思っていたのは今日までだったようだ。教室から聞こえてくる声を聞いてしまった。

教室の中の人たちに気付かれる前に平瀬は足早にその場を立ち去ることにした。

姫路は自分のことを殺そうとしていた。しかしそれは仕方のないこと。姫路は任務を遂行しなければ殺されてしまうのだから。

自分の命は大切だ。死んでしまっただけはなにも達することなどできない。生きているからこそ意味がある。

姫路は友達だと思っていた。しかしそれは思い上がりだったようだ。

彼女は組織の命令で自分と仲良くしていたのだ。あの時自分に話しかけてくれたのだ。

友達だからではない。

この町にまで付いて来てくれたのも当然だ。暗殺対象が移動する

のだから。

実家を出ると言った時姫路はどのように思ったのだろうか。応援してくれていたのだろうか。面倒な奴だと思われたかもしれない。

さっきあの教室で姫路は言ってくれた。一番の親友だと。

建前なのか、本当の気持ちなのかそれはわからない。確かめる勇氣など自分にはないだろう。

皆本は言っていた。二人とも助けると。日本政府を倒すと。

そんなことは無理だ。日本革命で蛍火だってなしえなかった。それは彼が一番良くわかっているはずだ。

平瀬は考える。自分の取るべき行動はなんなのか。

平瀬は自宅に向かうのだった。

決意2

次の日平瀬は学校を休んだ。

テロリストになるのだと決意はしたものの平瀬を守るということを忘れてはいけない。

姫路と相澤は一日中そわそわしていた。護衛対象がいなくては学校に来る意味などない。

放課後、三人で平瀬のお見舞いに行くことになった。もしかしたら熱で寝込んでいるのかもしれない。

玖珂は組織との連絡があるらしく東京に戻ってしまっていた。彼の協力があれば日本政府を倒すのは夢物語ではないだろう。

道すがら相澤は緊張の面持ちだった。

「おれ、女の子の部屋行くの始めたぜ。どうしよう」

「別になんもないから、お前の想像しているようなことなにも起きないからね」

「皆本さんも緊張しているんじゃないですか？ 手に汗かいていますけど」

姫路は鋭かった。確かに緊張していた。平瀬の家に行くのは初めてだった。もちろん実家には何度も行っていたが。

平瀬の住むアパートは外観は普通だった。お嬢様が住んでいるとは誰も思わない。

オートロックのセキュリティが付いているわけでもない。女の子の一人暮らしにしては警戒心が微塵も感じられない気がする。

平瀬の家は二階の一番手前の部屋だ。外に付けられた階段を上る。カランカランと軽快な金属の音がした。建てられたばかりの建物のようにある。

姫路がインターホンを押す。返事はない。

「眠ってしまっているかもしれませぬ」

「ここまで来て帰るのは勘弁して欲しいぜ」

「どんだけ女の子の家に上がりたんだよ、相澤は」

「合鍵を使いましょう」

姫路は制服のポケットから鍵を取り出した。女子の制服のスカートにはどこにポケットがあるか良くわからない。四次元ポケットでも付いているようだ。

「なんで鍵なんて持ってんだよ」

「平瀬さんがくれたんです。いつでも来ていいからって」

本当に姫路は平瀬と仲が良かったようである。あの平瀬が他人を信用するなど信じられない。

姫路は鍵を空けた。扉を開ける。部屋の中は静かだ。

部屋に入ると目に入ったのはキッチンだ。水周りは綺麗だった。

平瀬は家事が得意である。さすが育ちがいいと言ったところか。

廊下を抜けると部屋がある。ワンルールの部屋らしい。ガラスのテールがあり、壁際にはベッドが置いてあった。

平瀬はベッドの上に寝ていた。布団もかけずに制服のままだった。まるで昨日帰ってきてからそのまま倒れたように。

「平瀬さん、お見舞いに来ましたよ。勝手に上がらせてもらいました」

平瀬は姫路の呼びかけにも答えない。姫路は平瀬の体をゆすった。

「平瀬さん起きてください」

「ちよつと待て！」

皆本は叫んだ。急いで平瀬に歩み寄る。首筋に手をあてる。

「どうした？ いきなり叫んで」

皆本はゆっくり平瀬の首筋から手を離し、立ち上がった。

「死んでる」

平瀬は死んでいた。

決意3

「え？ 嘘ですよね？」

姫路は平瀬の体をゆすつている。起きるはずがない。死んでいるのだから。

「だれがこんなこと……。まさか政府の人間におれたたちの計画がばれた？ 姫路が裏切ったことを知って直接手を打ってきたのか」「違うと思うよ」

皆本が手に持っていたのは一通の手紙だった。テーブルの上に置かれていたのだ。

手紙にはたった二行しか書かれていなかった。見覚えのある平瀬の整った文字。

蛭へ。

来世でわたしを見つけてください。

「自殺したみたいだね」

「なんで自殺なんてする必要があるんですか！ 組織の人間に殺されたんですよ！ わたしは許さない！ 全員ぶっ殺してやる！」

おそらく自殺で間違いないだろう。

平瀬は姫路を救ったのだ。そして皆本を。

平瀬は皆本たちの計画をどこかで知ってしまった。どこで知ったのかはわからないが知ってしまったのは間違いないだろう。

平瀬はおそらく皆本たちでは日本政府を倒せないと考えたのだろう。誰か犠牲が出るかもしれないと。

だからそれは避けたかった。しかし日本政府を倒さなければ二人が助かる道はない。

皆本が日本政府を倒すという案を出さなければ姫路は自ら死を選んでいただろう。

しかし、姫路が死んだとしても日本政府はまた別の刺客を送り込んでくるに違いない。イタチごっこだ。

平瀬が死ぬまで計画は終わらない。

自分が死ねば姫路が死ぬことはない。皆本たちが日本政府を倒す必要もなくなる。

その結論が自殺だった。

「ばかだなあ。みんながお前のこと救おうとしてたのに。逆に救われちゃった」

相澤がつぶやいた。彼は上を向いている。もしかしたら泣いているのかもしれない。

皆本は拳を握っていた。強く握りすぎて血管から血が流れ出ている。

「わたしが平瀬さんを殺したようなものです！」

姫路は泣き崩れた。

「いや、お前のせいじゃない。日本政府が悪いんだ。平瀬は日本に殺された。皆本、おれは止まれねえ。止まるわけにはいかねえ。日本政府を倒す、平瀬の仇をとる」

「そうです、許せません。このままテロリストになりましょう。この国は腐ってます。わたしたちで国を変えましょう」

「やめだ」

「はっ？ なに言ってるんだ！ 悔しくないのかよ！」

「一人に……してくれ」

姫路と相澤は顔を見合わせた。しばらくはなにを考えている様子だったが、二人は部屋を出て行った。

部屋には平瀬と皆本が二人きり。

平瀬は死んでしまっただけ一人きり。

平瀬が死んだのは日本政府のせいじゃない。もちろん姫路のせいではない。

皆本のせいだった。自分のせいで平瀬は死んだのだ。

守りきれなかった。

平瀬の遺体は綺麗だった。どこにも外傷はないように思えた。平瀬の柔らかさそうなくちびる。触れたことのないくちびる。

きみは怒るだろうか。

怒ったりはしないだろう。もう死んでいるのだから。

皆本はくちびるを重ねた。

彼女のくちびるは冷え固まって、なんの味もしなかった。

理想の国？

携帯電話が鳴った。そこで意識を取り戻す。部屋の中は真っ暗だった。

どうやらいつまにか時間がたっていたようだ。

皆本は携帯のディスプレイを見る。着信は玖珂からだった。

近所の公園に集まって欲しいとのことだった。

玖珂は平瀬が死んだことを知っているのだろうか。

きつと相澤たちが連絡しただろうと思い、皆本は立ち上がった。

テーブルの上の鍵をで部屋には鍵をかけた。

誰にもこの部屋に入って欲しくなかった。ただの自己満足だと皆本はため息をついた。

公園に着くと、いたのはいつもの三人だけではなかった。玖珂の後ろには暗くて見えにくい黒服の人間が多数いる。

玖珂の仲間だろう。

皆本が到着したのを見て、玖珂は話し始めた。

「この場に集まっていたあなたはこれからのことについて話し合うためです」

やはり玖珂は平瀬の死を知っていた。

「これからって？」

「我々とともにテロリストになるのか否かということですよ」

「玖珂の目的は平瀬を仲間にするにすぎたんだろ？ 平瀬はもういない。その時点でお前らの計画は破綻してしまったんじゃないのか？」

「いえ、我々が仲間にしたかったのは螢火のリーダーですよ」

「だから平瀬は死んだんだよ！」

「確かに、平瀬は死にました。しかし螢火のリーダーは生きています」

「なに言つてやがる。平瀬が死んだのに蛍火のリーダーは生きている？」

「まさか！ 蛍火のリーダーは平瀬さんではなかったというんですか？ じゃあ一体誰が……」

「目の前にいるではありませんか」

玖珂は一人を指差した。その先には皆本がいた。

「皆本ケイ、いや源蛍と言ったほうがいいのかもしれませんが」

「まさか！」

「蛍火の幹部はみな蛍の名前を名乗っていました。ヒメボタル、オバボタル、ヘイケボタル。」

「なにもリーダーがヘイケボタルだという証拠はなかった。我々がそう思い込んでいただけだった。本当のリーダーのコードネームは……」

源氏蛍。

「確かに、蛍火のリーダー、ゲンジボタルとはおれのことだ」

暗闇の中にある公園。公園内の街灯のおかげでやっとみんなの顔が見える程度だ。

暗闇の中皆本は光を得て浮かび上がっているようだった。まるで自ら発光する蛍のように。

「皆本が蛍火のリーダー？ 確かにこいつは素人にしてはやる方だけれどテロリストって柄じゃないだろ」

「本人が認めているんです。間違いありません。しかし疑問が残ります。なぜ平瀬さんが自殺したのか。自分がリーダーではないとわかっていたのに自殺をした。その経緯を皆本さんは知ってらっしゃるのではないですか？」

あれは二年も前の話。皆本がまだ平瀬家に入入りしていたころの話だ。

理想の国？

ほたるには兄がいた。名前を蛭一といった。

蛭一はほたるとは年が離れていた。だがいつも遊んでくれた。

いつも三人で遊んでいた。ケイにとつても蛭一は兄同然の存在であつた。

蛭一は優秀で平瀬家の長男としての役割を果たしていた。

一流の大学を出て、父親の秘書をしていた。

そしてケイが中学生になつたころ国会議員に初当選したのだつた。

蛭一は信念を持っていた。理想の国を作ろうと。自分がこの国を導くのだと。

しかし蛭一は思い悩んでいた。いくら優秀だろうが若手議員が国を変えるなど容易いことではない。

ある日、蛭一はケイを自室に呼んだ。ほたるにも内緒ということだつた。

中学生のケイにとつて蛭一は憧れそのものだつた。

その蛭一から妹にも内緒で呼び出されるということにケイが興奮を覚えていた。

今でも鮮明に覚えている。

蛭一の書斎。高価そうな椅子に座りながら蛭一は中学生のケイにこう言つたのだ。

「一緒に理想の国を作らないか？」

蛭一は組織の中から国を変えるのに限界を感じていた。外側から変えていくしかない。

蛭一が選んだのはテロという選択肢だつた。

ケイは断る理由など見つからなかつた。蛭一が自分を必要としてくれている。それだけでうれしかった。

「おれは平瀬家の蛭一だからヘイケボタルだ。そしてケイ、お前は皆本蛭だからゲンジボタルだな」

蛍一は笑っていた。自分たちを蛍の名前で呼び合うことにした。組織の名前に蛍の名を入れた。

蛍一は平瀬家の財力を用いて反政府組織を大きくしていった。しかし問題があった。

蛍火には日本政府を倒すだけの正当な理由がなかったのだ。

理由もなく武力行使に出るは世間から犯罪者扱いされてしまう。

テロリストは国民のヒーローにならなくてはいけない。蛍一はいつもそう言っていた。

そこで蛍一は一つ作戦を思いつくのだった。それは海外組織による日本人の拉致事件だ。

もちろん海外の組織など存在しない。自分たちで自分たちのリーダーを縛り上げ、日本政府に要求をつきつけるだけでいい。

要は自作自演だ。既成事実さえあればいい。

蛍一がいない間、蛍火の指揮はケイが取っていた。ケイもまた優秀だった。

周りの仲間たちにはまるでテロリストになるために生まれてきたような子供だと言われた。

計画は実行された。蛍一の思惑通り、日本政府は交渉で解決しようとしてきた。

そして蛍一は死んだ。まさに計画通りだった。

ケイたちは正当な理由を得た。あとは蛍火として名乗りを上げ日本政府を倒すだけだ。

このまま計画はうまくいくと思われた。誰もがそう思っていた。

しかし日本政府が敗れることはなかった。

蛍火のリーダーが政府に自首したのだ。

蛍火のリーダーが裏切ったという話はすぐに蛍火内に広がった。

そして士気は下がり、蛍火は内部から崩壊していつてしまった。

もちろんケイが仲間を裏切ったりなどしない。

自首したのは平瀬ほたるだった。彼女は自分がリーダーだと名乗り出て計画を潰したのだった。

彼女がなにを思ったのかはわからない。想像するしかない。

おそらく計画が知ってしまったのだ。兄がテロリストだったことも、拉致事件が自作自演だったことも、兄が自ら死んだことも、ケイが計画に加わっていたことも。

ケイが彼女を恨んだ。あともう一步だった。

あともう一步で蛭一との約束を果たせそうだった。

理想の国を作る、その約束は消えてなくなった。

それから平瀬家には近づかなくなった。

ほたるはなぜか逮捕されることもなく、普通に学校に来ていたことがケイにとって許せることではなかった。

なぜ彼女は罰を受けないのか。

蛭一は無駄死にした。蛭一を殺したのはほたるだ。

ケイにはなにも出来なかった。

しよせん、ただの子供だった。

最終話 始まり

「だからほたるを殺したのはおれのせいなんだよ」

皆本は搾り出すような声で言った。

政府が殺したかったのは蛍火のリーダー。つまり皆本だった。

平瀬は本来殺されるべきではなかったし死を選ぶ必要はなかった。全ての罪をかぶって平瀬は死んでしまった。

皆本は本当のことを打ち明けるチャンスは今までにいくらでもあった。

そうしなかったのはなぜだろうか。

平瀬を殺したいほど憎んでいたから？

そうだ平瀬は蛍一との約束を踏みじった。許せるわけがない。

しかし皆本は蛍一の死に加担した。平瀬にとって皆本は殺したいほど憎んでいたに違いない。

平瀬を助けたかったのは本当だ。罪滅ぼしがしたかった。

それで許してもらえないはずがないとも思っていた。ただの自己満足だ。

じゃあなぜ皆本は名乗り出なかったのか。それは怖かったからだ。暗殺の標的が自分に移るのが怖かった。殺されなくなかった。平瀬が全て身代わりになってくれていた。

自分は安全なところからただ見ているだけだった。

平瀬がまさか本当に死ぬとは思わなかった。自殺するならもっと早く名乗り出るべきだった。そうしたら彼女は死ななくてすんだに違いない。

「誰でも死ぬのは怖いです。わたしだって死にたくなくて、でも平瀬さんにも死んで欲しくなくて、みなさんに迷惑をかけてしまって、

.....」

「お兄さんとの約束があるなら、なおさら共に政府を倒しましょう」
「でも平瀬は皆本に同じ過ちを繰り返して欲しくなくて自殺したん

だぜ？ 平瀬の気持ちを踏みにじることになんじやないのか」

しばしの沈黙。みんなが皆本の決断を待っている。

そして皆本が口を開く。

「日本政府は倒さない」

「そんな……」

玖珂は落胆の色を隠せないようだ。

「いままでのことを日本政府のせいにするのはお門違いだよ。それにこの国はおれたちが壊すほどの価値もない」

誰もいいなりになりたくて生まれてきたわけじゃない

絶望しか持たされなかつたおれたちだからこそ

次の世代には希望を持って生きていつて欲しい

あの頃にはもう戻れない

戻れないなら進むしかない

正義は常にともにある

作ろう

誰もが笑って暮らせるそんな国を

この国に未練なんてない

ぶつつぶす義理もない

新しい国を作ろう

この日本という国に

「日本から独立する！ 独立国家をここに建国する！」

皆本たちの戦いはここから始まるのだ。

最終話 始まり（後書き）

ひとまずお話は終わりです。

ケイの選択は政府を倒して国を変えることではなく、新しい国を作るということでした。

この先のお話は一応考えてはいます。

たぶん時系列は2年後ぐらい進んでると思います。

このとき主人公たちは15、16才なので2年後は18ぐらいですかね？

この時期って人間として考えが変わって固まっていくな時期です。

大人の考えを持った彼らをどうか楽しみにお待ちください。

ではまたいつの日か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6806n/>

絶対平和宣言！！

2010年12月31日21時10分発行